へり、吾壯年の頃ほひ是を道士白幽先生に聞けり、白幽は城州白川の巖窟に隱れて閲壽齡二百四十歳を閲すと、時の人是を稱して白幽仙人と云ふ、故の丈山氏の師範なりと、幽が言に曰く大凡生を養ふの術上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に溫煖ならん事を要す、須く知べし、元氣をして下に充しむるは是生を養ふ至要なる事を、往々に神丹は五行合て錬と云ふ事をのみ聞いて、水火木金土の五行は卽ち眼耳鼻舌身の五根なる事を知らず、五根を聚て神丹を錬とは如何なる事ぞとならば、蓋五無漏の法あり、眼妄りに見ず耳妄りに聞ず、舌妄りに言はず身妄りに觸ず、意妄りに思慮せざる時は、混然たる本元の一氣湛然として目前に充つ、是卽ち彼孟軻氏の謂ゆる浩然の一氣なり、是を引て臍輪氣海丹田の間に收て歳月を重ね是を守つて守一にし去り、是を養つて無適にし去時覺えず丹竈を掀翻して、內外中間八紘四維總に是一枚の大還丹自己卽ち是天地に先つて生せず、虛空に後れて死せざる底の長生久視の大神仙なる事を覺得せん、茲に於て大洋を

攪いて酥酪となし、厚土を變じて黃金とす、是故に言『還丹一粒鐵を點じて金と成す』白玉蟾が曰く「生を養ふの要は先づ形を練るに若かず、形を練るの妙は神を凝すにあり、神凝れば卽ち氣聚る、氣聚れば則ち丹成る、丹成れば則ち形固し、形固ければ則ち神全し」と須く知るべし、丹は果して外物に非る事を、蓋し地に玉田あり、粱田あり、玉田は珠玉を產するの地、粱田は禾稼を成ずるの場、人に氣海丹田あり、氣海は元氣を收養ふの寶所、丹田は神丹を精練し、壽算を保護するの城府なり、古に云く「江海、能く百谷の王たる所以は其の善く之に下るを以てなり」滄海既に萬水の下を占て百川を含容して增減なし、氣海既に五內の下に居して眞氣を收て飽事なし、終に神丹を成就し仙都に入る、丹田なる者一身三號吾謂ゆる丹田は下丹田なる者なり、氣海丹田各々臍下に居す、一實にして二名あるが如し、丹田は臍下二寸氣海は寸半眞氣常に此內に充實して、身心常に平坦なる時は世壽百歳を閲すと云ども、鬢髮枯れず齒牙動かず眼力うた〻鮮明にし

て皮膚次第に光澤あり是卽ち元氣を養ひ得て神丹成熟したる効驗なり、壽算限り有べからず、但し修養の功の精麤如何に在らくのみ、古の神醫は未だ病ざる先を治す、よく人をして心を攝め氣を養はしむ、庸醫は是に反す、已に病の後を見て針灸藥の三を以てこれを治せんとす、救ざるもの多し。大凡精氣神の三の物は一身の柱礎なり、至人は氣を惜んで使はす、蓋し生を養ふの術は國を守るが如し、神は君の如く精は臣の如く氣は民の如し、夫その民を愛するは其國を全うするゆゑんなり、其の氣を惜むは其身を全うするゆゑんなり、民散する時は國亡ぶ、氣竭る時は身死す、此故に聖主は常に心を下に專にし、庸主は常に心を上に恣にす、上に恣にする時は九卿寵を恃み、百僚權に傲つて曾て民間の窮枯を顧る事なし、歛臣貪り掠め酷吏僞剝、野に菜色多く、國に餓莩倒る、賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨み終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷ゆるに至る、心を下に專にする時は、常に民間の勞疲を忘る事なく、民肥え國强く令を違するの臣民なく、境を侵の敵國

なし、人心も亦然り至人は常に心氣をして下に充しむ、此故に七凶內に動事なく、四邪外より侵す事能はず、營衞充ち心神健なり、身終に針灸の痛痒を知ざる事强國の民の勺斗の聲を聞ざるが如し、岐伯昔し黃帝の問に答ふ、恬淡虛無なれば眞氣これに從ふ、精神內に守らば病安よりか來らんと、今の人は此に反す、生より死に至るまで、主心片時も內を守る事なし、主心とは何物と云ふ事をさへ知らず、無智なる事犬馬の日々に足に任せて走るが如し、危いかな、兵家に云すや驚悲妄りに起るは主心定らざる故なりと、蓋し主心內に守る時は憂悲恐怖妄りに生ずる事なし、若人片時も主心なき時は死人に如同す、或は放辟邪侈至らずと云ふことなし、譬へば是に一箇の舊宅有んに、衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云ども、主の有んする家へはゆへ無うして他の人妄りに出入する事叶はず、其家もし主人を失する時は賊盜も潛み休ひ、乞兒も亦來り宿し孤兎競ひ走り、狸貉竄れ睡る閑神晝さけび野鬼夜吟す、千妖百怪群邪の窟宅とならん、人身も亦然り、正念工夫の主

心腑輪氣海の間に磐石などを淘居たるが如く、凛然として主張する時は一點の妄念情量なく、半點の思想ト度なうして、天地一指萬物一馬、厚重山の如く寛大海の如くなる底の一員の大丈夫、佛祖も手を挾む事能はず、魔外も窺ひ知る事得ず、日々に萬善を行じて以て倦事なし、謂つべし、眞正報恩底の佛子なりと、其人忽ち邪境に奪はれ妄緣に引れて覺えず正念工夫の主心を打失す、是を忽然念起名爲無明と云、煩惱の邪魔蜂の如くに起り、邪見の妖魅蟻の如くに競つて四大夢幻の廢舍五蘊空華の朽宅忽ち化して魔魅の住處となりぬ、千態萬狀日々に幾萬種の生死ぞや、外面は高蹈たる君子の風標あれども、內心は夜叉の變態多きが如し、心上は鎭へに八島の合戰より苦しく、胸中は常に九國の兵亂よりも煩はし、恰も長者火宅の譬へに等し、是を生死常沒の業海と云、若夫正念工夫の船筏精進勇猛の櫓帆なくんば、識浪情派の急流におし浸されて、臭烟毒霧の暗區を越得て四德の彼岸に到る事を得んや、悲い哉人人如來の智慧德相を具足して少しも缺事な

く、箇々佛性の如意寶珠を圓備し鎭へに大光明を放つて娑婆卽寂光の淨刹毘盧法性の眞土に住みながら、慧眼すでに盲たる故に、娑婆なりと見錯り衆生なりと思ひ違へて、得難き人身、逢ひ難き一生を闇々と牛馬などの無智昏愚なる如く、何の辨もなく明かし暮して、苦しかりし三塗悲しかりし六趣の巷を吟ひ遠りて、少しも變遷あらざる舍那常寂の眞土を把へて地獄なりと恐れ迷ひ、無間なりと泣き苦しむ、是只よの常どるにも足らぬ斷無の小見に傲り片腹痛き少許の口耳の學解に傲て、佛法を信ぜず正法を聞かず、虛口をのみ利て正念工夫の主心を片時も守る事なき人々のなれの果なり、悲みても尙悲しむべきは流轉永劫の罪累、恐れても尙恐るべきは生死長夜の苦果なり、天下の三聖人なりと崇られさせ給ふ、延喜天曆の帝さへ焦熱の猛火に黑ませ給ふを笙が岩屋の日藏上人はまのあたりに見上りたりしに、我は粟散小國の王たる事を恃み、憍慢甚だしかりし罪にて斯は成たるぞと宣げるとぞ、敏行の朝臣は和漢の才に長じ手 迹 麗 しくおはして法華經二百部

まで書寫し給ひたれども、正念工夫はおはさゞりければ、苦趣に墮して紀の友則の許に來りて、救ひを乞給ひけるとぞ、又本朝無雙の名將也と稱せられ給ひて目に餘りたる朝敵を從へ、至尊の宸襟を休め奉り、南都北京の貴僧高僧も加持しあぐみたりける天子の御惱を弓のすびきして弦音にて搔拭ひたる如く治し上りたる程の八幡殿さへ、閻王の廳に跪づき給ひ、多田の滿仲は病中閻王の使に召されて冥府の有樣を見了り蘇生し、殊の外に恐怖し給ひて直ちに六角堂に入入道し念佛し給ひけるに、汗と涙と疊を打透しけるとぞ、六國を併呑し四海を囊括して八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も、鬼趣に墮して苦を受け、周の武帝は鐵梁の責を受け、梟雄天下に聞ゑたりける秦の白起は糞泥獄に沈みて後明の洪武の始め吳山の三茅觀なる處に於て雷、白き蜈蚣の長け尺餘なるを震殺しけるに、背に白起と云る文字あり〳〵と記しき由罪業の空じ難き事知ぬべし、謂事なかれ塵務繁絮にして參禪に暇なく、世事繽紛として工夫續き難しと、須く知るべ

し眞正參禪の衲子の前には塵務おく、世事なき事を、譬へば茲に一人あらんに、往來絡繹たる巷稠人廣衆の中に於て錯つて二三片の金子を遺落したらんに、人目もげしとて棄てや置べき、物騷がしとて尋ねずやあるべき、多くの人々を押わけかゝくぐつても一回尋ね出して我手に入ざらん限りは、心頭休罷する事能はじ、然らば即ち塵務繁しとて參禪を怠り、世事煩はしとて工夫を廢せん人々は諸佛無上の妙道を以て、彼兩三片の黃金程には貴び惜まざる者に非ずや、塵務の上世波の間に於て彼黃金を遺落したりし人の如く專一に空明したらんには誰か歡喜の眉を開かざらんや、此故に妙超大師曰く「見るやいかに加茂のきをひの駒くらべ、かけつかへすも坐禪なりけり」と眞珠庵主は此意を述して看經すべからず坐禪すべし、掃地すべからず坐禪すべし、茶の實種べからず座禪すべし、馬に乘るべからず座禪すべしと、これは是眞正參禪底の古實あり、吾正受老人常に云く、不斷座禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、管絃歌舞の席

に入ても、安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで退かず、譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて、三千大千世界を繞る事千回百匝すと云ども、正念工夫片時も打失せず、相續不斷ある是を名て眞正參禪の衲子とす、十二時中只一面皮を冷却し眼睛を瞠却して、毫釐も人情を交へざれと寔に貴ぶべし、兵法には亦云すや、且戰ひ且耕す是萬全之良策也、參學もまた爾り、工夫は且戰ふの眞修、內觀は且耕の至要、鳥の雙翼の如く車の兩輪の如し、內觀の秘訣は、予向に江湖參玄の衲子の爲に夜船閑話に書し了れり、予常に此等の趣きを以て衲子の禪病を救ふ事幾人と云數を知らず、中に就て重症必死に向んとする者八九を治す、學者必ず內觀と參學と共に合せ並べ貯へて以て生平の本志を成せよ、學道の人縱ひ參じて五派七流の大事を究得るとも、若夫れ短壽ならば何の用を成すに堪んや、縱ひ又內觀の力に依て彭祖が八百の歲時を閱すと云とも、若し夫れ見性の眼無んば唯是れ一箇老大の守屍鬼何の好事かあらん、若し又枯坐

默照を以て足りとせば、枉て一生を錯り大いに佛道に違せん、只佛道に違するのみに非ず、大に世諦もまた廢せん、何が故ぞ若夫諸侯大夫は朝覲を怠り、國務を廢して枯座默照し、武夫は射御を疎にし武術を忘れて枯座默照し、商賈は戶店を鎖し算盤を碎て枯座默照し、農夫は犁鋤を擲ち耕耘を止めて枯座默照し、工匠は繩墨を捨て斧斤を拋つて枯座默照せば、國衰へ民疲れ、賊盜頻りに起つて國それ危からんか、然れば則ち衆民瞋り恨て必ず云ん、禪は窮めて不祥の大兆なりと、殊に知ず古へ禪林の盛なりし時南獄、馬祖、百丈、黃蘗、臨濟、歸宗、龐谷、興化、盤山、九峯、地藏等の諸聖拽石搬土、水薪菜蔬、作務普請の鼓を鳴して專ら動中の得力を求む、此故に百丈大師曰く「一日作ざれば一日食はず」と、是を動中の工夫不斷座禪と云ふ、此風近代地を拂つて盡、蓋し斯いへばとて坐禪を嫌ひ靜慮を謗るにし非ず、大凡一切の賢聖古今の智者、禪定に依ずして佛道を成就する底半箇も亦無し、夫れ戒定慧の三要は佛道萬古の大綱なり、誰か敢て輕忽にせ

んや、然るに向に謂ゆる禪門の諸聖の如きは、超宗越格眞正無上の大禪定擬議するときは、卽ち電轉じ星飛ぶ、牴羊の眼狐狸の智、如何ぞ敢て窺知る事を得ん、縱ひ又默照枯座して立地に成佛し、立地に大光明を放つ底の好事ありとも、諸侯大夫子庶民家萬般の公務千般の家事ある何の暇あつてか片時も打座する事を得んや、此に於て病と稱して公務を遁れ、家業を廢して三五七日一室を閉ぢ戶牖を鎖して幾枚の蒲團を重ね一枝の香を挾んで座すと云ども、平生の塵務に疲れて、一寸座すれば一丈睡り、三合の座禪には千萬斛の妄想を集む、既にして眼を瞠り牙を咬み拳を握り梁骨を豎起して、一座すれば萬般の邪境頭を競つて生ず、玆に於て額を攢め眉を斂めて覺ゑず悲泣して曰く、官途道業を妨げ仕路禪定を障ふ、如かじ官を辭し、印を解て水邊林下寂寞無人の處に在て、恣に禪觀を修し永劫の苦輪を遁んにはと、大に錯り畢れり、大凡人の臣たるの道は主君の飯を喫して主君の衣を纒ひ主君の帶を結で、主君の刀を帶、水も亦他處より擔ひ來るに非ず、耕さず

して食ひ、織ずして纒ふ、身體手足髮毛爪齒總に是君恩の所成なり、恁麼にして成長し來つて三四十歳に至つて主君の政事の助け、專ら王佐の才を抽んで君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし專ら君恩に報答すべき時到つて、袖裏に密に念珠をつまぐり、口頭幽に佛號を唱へて、出仕に懶く公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなくて、動もすれば病と稱して退かんとす、恁麼の志行にして縱ひ三年五歳、陰僻の處に在つて精錬刻苦し、思想盡き情念止に似たりと云ども、肝膽傷み悴け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落るを聞ても胸間裂るが如し、大將にも諸卒にも何の專途にか立べき、萬一國家の大事あらんにかゝる人々を引て、一虎口の門戶を堅めたらんに、敵軍潮の如に湧き旌旗雲の如に覆ひ、火砲は雷の落かゝるが如く響きわたり、貝鐘は山も崩るゝ許り轟き鳴り、戈戟は氷の如く拔き連たるを見聞かば、飲食咽に入ず、混震にふるへて手綱とる事さへ叶はで、鞍つぼにすがり平て、動もすれば自ら震ひ落んとす、果は步兵の爲に獲らる、何が故ぞ斯

の如くなる、只是三年五歳寂默枯坐の致す所なり、縱ひ熊谷平山などが如き勇士也とも斯の如く修行したらんには豈に震へざらめや、此故に祖師大悲善巧有てこの正念工夫不斷坐禪の正路を指す、諸侯は朝覲國務の上、士人は射御書數の上、農民は耕耘犂鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡績機織の上、若し是正念工夫あらば直に是れ諸聖の大禪定、此の故に經に曰く、『資生産業皆な實相と相違背せず』若正念工夫無んば、老狸の空穴に眠るが如ん、悲むべし此道今人棄て土の如くなる事を、往々に我法二空の黑闇谷を認得て、向上最上の禪なりとして日々眉を皺め額を攢て死鼠の繭中に在が如く、祖庭は遙に雲煙を隔つ、佛經を嫌ふ事は跛鼠の猫兒を避るが如く、祖録を忌む事瞎兎の虎聲を聞に似たり、殊に知らず此は是二乘帝沒の舊窠相似の涅槃なる事を、此故に宗峰大師曰「三年までわれも狐の穴にすむ今ばかさるゝ人も理り」と悲歎し給ひき、去程に肇公は此れを『困魚箔に止り病鳥栖蘆に栖む』『少き安事を知つて、大に安事を知らず』と呵し給ひき、

眞正參玄の上士は入理の淺深如何ん、見道の精麁如何んに在らくのみ、誰か儞が在家出家を擇ばん、誰か儞が朝市山林を論ぜん、古への相國公美、大夫陸亙、尙書陳操、都尉李公、楊公大年、張公無盡等の諸君子の如きは、見性わが掌上を見るが如く參玄わが肺腑より出るが如し、佛海の深源底を蹈穩し禪河の毒波浪を並呑す、智鑑高明、識量寬大、閑神恐れ走り、野鬼悲しみ潛む、各々朝廷の政事を助けて天下を泰山の安きにおく、誰かその堂奧を見ん、張公の如きは官、宰輔にのぼり、位人臣の頂を極む、王佐の才豊にして、君信じ臣貴み、士敬して民懷く、天膏雨を下し、君淋字を賜ふ、壽百齡に近うして澤を四海に流へ、民堯年の秋に傲り、人舜日の暄を負ふ、上君恩に報答し、傍はら法寶を鎭護す、寔に天下の人傑なり、此故に言『家に在つて道を成ず張無盡、祿を食み禪を究むる楊大年』と實に千歳の美談あらずや、蘇內翰黃魯直張子成張天樂郭功甫等其餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子豊にそれ際限あらんや、見道各々林下の人に超過す、常に

萬機の政務を佐け、肩を萬國の衣冠に交へて、銀魚金龜の朱紫、貴海中に立ち禮學射御の間だ進退揖讓の席に臨で、片時も道情を打失する事かく、遂に祖庭の玄徽に徹證す、これ皆正念工夫不斷座禪の靈驗ならずや、佛道微妙の深恩ならずや、祖庭孤危の威德からずや、彼の默照枯坐を足れりとし、心源靜寂を禪なりとして、丘壑に餓死する底の類と寔に霄壤の間あり、これ謂ゆる尖兎を得ざるのみに非ず、鷹子も亦打失する者に非ずや、何が故ぞ徒らに見性する事能はざるのみに非ず、主恩も亦廢す、太だ憐むべし、寔に知る德力の淺深は進趣の當否に依る事を、工夫若し一人と萬人と戰ふ底の氣力あれば、豈にそれ林下と室家とを擇ばんや、若それ見道は特り林下の人のみに在といはゞ、民の父母たると人の臣たると、人の子たるとは望を其間に絕んか、縱ひ林下に在とも道業密ならず、志念純ならずんば何ぞ室家に異ならん、縱ひ又室家に在とも志願濃厚に操履堅實ならば、何ぞ林下に異ならんや、此故に言ふ「思ひ入る心の中に道しあらば、よしや芳野の山な

らずとも」と只兎に角にも諸大將の心がけ給はらんずる坐禪は此の正念工夫の不斷座禪に超えたる事は侍るべからず、此は是二百年來廢れ果たる古實にて侍り、何をか正念工夫と云ぞとならば、咳唾掉臂動靜云爲、吉凶榮辱得失是非、束ねて一則の話頭とかして、臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突据ゑ、本尊には卽ち大樹君、諸侯大夫は吾同業影向の諸菩薩衆、近習外樣の大小の諸臣は吾が舍利弗目連等の二乘の大弟子衆、士庶萬民は吾が赤子の如くなる所化の衆生ありと思して、專ら仁恕の心これあるべし、袴肩衣は直に是、七條九條の大法衣、兩口の打物は禪板机案、馬鞍は一枚の座蒲團、山河大地は一個の大禪床、上下四維十方法界は自己本有の大禪窟、陰陽造化は二時の粥飯、天堂地獄淨刹穢土總に是吾が脾胃肝膽樂府、內外三百疊は朝夕の看敎誦經、千百億の須彌山を束ねて以て一片の脊梁骨とし、其の餘の進退揖讓射御書數皆な是れ菩薩萬善同歸の妙行なりと觀念し、大勇猛の信心を抽で、彼內觀の眞修に和して起居動靜の間に於て、那時か是打失の

處、那時か是不打失の處と、時々に點檢する是古今の賢聖眞修の正路にて侍り、去程に子思子も道は須臾も離るべからず離るべきは道に非ずと宣ひき、魯論里仁の篇には『造次も必ず是に於てし、顚沛も必ず是に於てす』とは片時も打失する事なかれとの敎にて侍り、此道とは中庸の正道を言へり、正道とは、此經難持若暫持者我卽歡喜諸佛亦然と說き給ひたる法華經の事にて侍り、法華經とは卽ち正念工夫の大事を云へり、工夫とは自己本有の有樣を指す事なりと覺悟これ有るべし、生死の大事を透脫し佛祖の正眼を瞎却する底の眞實見性の正修にて侍れば、中々容易の事にし侍らず、只肝心は動靜二境の間逆順縱橫の上に於て、純一無雜打成一片の眞理現前して、千人萬人の中に在ても曠野に萬里の獨立したる心地あつて、彼厖老が謂ゆる『雙耳聾の如く眼盲の如し』なる境界は時々に此あるべし、是を眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り、此時退かず勤め進み給はゞ氷盤を擲擺するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞ざる底の大

歡喜あらん、若し人自家見性の眞僞如何ん、得力の精麁如何を知んと欲せば、先須らく謹んで傳大士の偈を見るべし、何が故ぞ、未透底の士は句に參ぜんより意に參ずべし、已透底の士は意に參ぜんより句に參ずべし、偈に曰く『空手にして鋤頭を把り、步行して水牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、』又曰く『燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走りて山門を出づ、』又『懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る』又『張公酒を喫して李公醉ふ、端的を知らんと欲せば北斗南に向つて看よ、』寒山子の偈に『青山白浪起り、井底紅塵飛る』若し人見性分明なる事を得ば此等の言句は、吾掌上を見るが如けん、若然らずんば言事なかれ、見性したりと、縱ひ又如上言句に於て逐一分明に見得徹したりとも、足りとする事なかれ、棄去て者疎山壽塔の因緣、南泉遷化の話、乾峰三種の病、五祖牛窓檻の話、宗峰大師曰く『朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何似又本有、圓成國師曰く、柏樹子話に賊の機有り』此等の話頭毫釐も疑ひ無事を得ば、須らく知べし、見處

佛祖と同一模範なる事を、參玄の上士と稱して何の愧る處かあらん、何が故ぞ、參禪は各々誓つて佛祖の心を明めん事を要す、若し夫佛祖の心を明らめ得ば、豈に夫佛祖の語話を明らめざらんや、若し夫れ未だ佛祖の語話を明らめずんば、須らく知るべし未だ曾て佛祖の心を明らめ得ざる事を、此故に七賢女經に曰く、『佛の言はく我が弟子大阿羅漢此の義を解すること能はず、唯大菩薩衆有つて應に此の義を解すべし』と此義とは何ぞや、西天此土祖々相傳し來る底の向上の祕訣なり、此義を了知せしめんが爲に此難透の話頭を留む、此故に眞珠庵主偈あり曰く『天台五百の阿羅漢、身法衣を著て人間に出づ、神通妙用儞に還可し、佛祖不傳の妙は難々』菴主は卽ち息耕東海七世の孫にして、其知見斯の如く痛快なり、貴ぶべし此時眞風尙未だ落ざりし事を、今時奴郎辨せず、玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬、往々に言ふ自心卽ち是佛話頭了して何かせん、心淨ければ淨土淨し、語錄を閲して何の用ぞと、此等の類を未得謂得未證謂證無慚昏愚の外道とす、竊か

に彼が心と稱する所以の者を見れば、八識賴耶愚癡無明の闇窟なり、錯々賊を認て子とおし、錯を以て錯に傳へて、祖々傳來の妙道なりとして、人の參禪學道、艱辛淸苦するを見ては、彼と彼とは圓頓の直指を知ず、二乘の根性なり、それとそれとは向上の禪を會せず、聲聞の部類おりと、彼が謂ゆる圓頓の直指點檢し見來れば、楞嚴に呵し給ふ、無明元本あり、彼二乘聲聞の人々には霄壤遙かに劣れり、而して逮得己利の賢聖を捉へて妄りに經賤す、寔に笑つべし、或は又一般あり、無の字にもせよ、柏樹子にもせよ、一向に手脚の著ざる處を禪道おりと妄想して以て透過とす、此は是一等の惡風俗、膏肓難治の大禪病、錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病、總にこれ妄分別眞正參學の上士の如きは則ち然らず、參じ參じて參ずべき無き處に到つて理盡き詞究まつて、技も亦究まり、天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて、而して後に罔地一下の安堵は得る事に侍り、左もなくて無明妄想生滅の心行を以つて難透難解の祕訣換骨奪命の大事を、彼此沙汰致し侍ら

んは恐ろしき事なり、佛も生滅の心行を以て實相の法を說事なかれと堅く制し給ひたるぞとて、正受老漢は常々眉を皺められ侍りき、然るに雲水往來の僧侶、十が八九大口を開いて傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひは侍らぬなどゝ會釋もなく云ひ散す底多し、試みに一則を擧揚すれば拳頭を堅るあり、一喝を吐くあり、十が八九は疊を叩く者多し、輕々に拶著すれば見性は存じも依らず、學文の功さへ無くて一文不通頑陋無眼の人々なり、斯く恐ろしき無賴不敵の働きは何れの知識の許より習ひ持ち來るやらん、去程に三五年も斯くわめきあるくよと思へば、天竺へ渡りたるか唐へ行たるか鳶に成たるか筵になりたるか、果は音も臭もなく成り行くは幾等と云ふ數を知らず、蟲齒の藥にも成らざる底の悟りあり、惜むべし棟梁の質あつて神俊の才を具足し、參玄力を盡し琢磨功を重ねば、佗後馬祖石頭にし去り、臨濟德山にし去つて、天下の蔭涼樹とも成り去るべき底の人々、苗にして秀んとする肝心の時節、筋なき妄解を習ひ來つて人の參禪學道精神を盡す

を見ては、馳求の心止まずと云うて地空を叩いて大笑す、儞が頑空無記賴耶の暗窟を認め得て歇得する底の糟見解三日五日眉を皺めば驅烏の童子も亦須らく解すべし、況や他人の處より習ひ持來らんをや、佛祖も手に餘したる者に成て初めは信ずる人も間これあれども、元來無記暗鈍の瞎凡夫、次第に在家實頭の人々にだも及ばず、果は檀那施主にも忌嫌はれ、行方知らず成り行くは近年行脚の風俗なり、如何がして眞正の得悟は得る事ぞとならば、塵務繁絮世事紛然七顚八倒の上に於て、譬へば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に、匹馬單鎗大勇猛の精神を震つて一方を突き破つて、かけ拔んず時の心持にて正年工夫絶ずりもなく、精彩を著け手脚の下すべき樣もなく、四面空洞として心身ともに消失せたる心地は時時にこれ有る者に侍り、此の時恐怖を生せず、勵み進み侍れば一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り、總じて參學は妄念情量と戰ひ、昏沈睡魔と戰ひ、動靜違順と戰ひ、是非憎愛と戰ひ、一切の塵境と相戰ひ、正念工夫を推し立もて行張合

にて不慮の省覺はこれ有事に侍う、彼勇施菩薩の如きは大重禁を犯して懺悔すべきに地なし、徒に憂悲惱亂す、忽ち自ら大誓を發して憂惱と戰つて默座す、忽然として無性を悟る、雲門大師は老睦州に左脚を逼折せられて大悟し、蒙山の異禪師は痢疾を患る事晝夜百次、身體苦しみ疲て前面只死あるのみ、此に於て誓願を起し苦痛と戰つて死座す、少焉腸大ひに鳴動する事數回、痢疾は拭ふが如く、平癒して大に得所あり、大圓寶鑑國師の如きは華園に入つて聖澤の庸山老師に謁して所見を演ぶ、山漫罵して打つて追出す、師憤然として煩暑の日、竹林の中に入つて寸糸かけず裸形にして枯座す、夜に入つて蚊子百萬競ひ來つて身上に集り圍んで師の肌を咬む、此に於て痾痒と戰つて齒を切り拳を握つて癡坐す、正氣を打失せんとする者殆んど數次、圖らず豁然として契悟す、昔し調御世尊は雪山に在つて苦修六年、皮骨連立蘆芽膝を穿つて臂に至り、慧可大師は臂を斷つて自の本源に徹し、玄沙は泣々象骨を下つて蹶躓して左脚を破つて徹骨徹髓し、臨濟は痛

棒を喫して破家散宅す、これ古今の榜樣なり、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なし、今時の如く、徒らに空しく胸臆の凡解を恃んで自己脚跟下の大事を了簡分別して以て足れりとせば一生妄想の魔網を破る事能はじ、小智は菩提の妨げとは此等の輩にはべり、中古禪門の盛なりし時、正念工夫心掛け給ひし士大夫は、公より退るの閑暇の日は如何にも健かなる士卒七八個を從へ、大馬に跨つて兩國淺草などに等しき人立多る所を用有げに馳せ廻り給ひける由、是は動中の工夫親疎如何んを得失如何んを矯めし試みん爲なりける由、去程に蜷川新左衞門は鬪諍喧嘩の席に望みて大省力を得、太田道灌は陣中に在つて組布れながら和歌を詠じ、正受老漢は其里へ狼の數限りもなく來り集つて讐をせし時に所々の墓原に七夜まで座し明したりと、是は彼等に頸筋耳の根など吹き嗅れんずる時に正念工夫相續間斷ありや否やを觸し試みん爲なりと申されき、書寫の性空上人は常に悲嘆し給ひけるは世念濃厚なれば道念輕微なり、道念濃厚なれ

ば世念輕微なりと宣ひき、こら〳〵思ふに果しもなく管々しき繰言、披見も六箇布思すべき者を、世念濃厚に書續けたるに似たれども、鶴林半死の殘喘長庚曉月頼みなき命に何の不足の處有りてか尾を搖かして憐みを乞んや、寵遇を權勢の門に栽るにし非ず、聲名を世波の底に鈎るにし侍らず、是を序に人々の道情をも助けよかし、法門無量誓願學と申す事の侍れば菴居の人々の他後法施の一助ともなれかし、且千兵は得易く一將は求め難しと申す事も侍らば、書中少にても取べき處あつて幕下の道情をも助け、增て禪學成熟し給はゞその餘波必ず左右の人々に及ばん、左右若其恩波に浴せば其澤必ず一城の人々に及ばん、一城若その恩波に浴せば其澤必ず一國の人々に及ばん、何が故ぞ、一人の心は千萬人の心なる故に、終に天下國家に及ぼし、上王化を佐け下庶民を利せん、然らば則ち宇宙の間那箇の盛事か是に如んや、これ老僧が平生の微志かり、若然らんずば何の追從にか終夜孤燈を挑げ老眼を摩挲して果しもなき問ず語りを繰返し繰返し書送り侍るべきや、

道理ある事に思さば捨置ず熟讀し給ひて內觀養生の祕術に契ひ身心共に壯健にして速かに參禪得力因地一下の歡喜をも得給へかし、次に願くは此內觀の加被力に依つて武內の宿禰浦島子が長壽をも保ち給ひ、上天下の政事をも補けて萬民を憐撫し、內法寶を衞護し飽く迄法喜禪悅の樂を究めて法成就にも至り給へかしと思ふ許りの寸志にて侍り、老夫壯年より思ひ付侍りけるは正念工夫の勝手には武士の身の上程よき事は有べからず、武士は明け暮れに身を儒弱に持事叶ず、出仕にも附合にも如何にも嚴重なる者なれば髮結立て、上下か又は袴羽織にて大小手挾み、折目高なる起居の上には正念工夫は溢れ建るゝ程潔よく打見ゆ、增てよき駿馬の太く逞しきに打騎つて百萬騎の敵軍をも人無き處を通る如く乘破り〳〵驅崩すべき顏色は天晴見事なる不斷座禪かく工夫しもて行たらんには、出家は一年にて得力これあらば武士は一月、出家は百日にて得力是あらば武士は三日にも利運は開かるべき者を、志なく案內知り給はぬ故に、生唼磨墨とも云ふべき大馬の

背上に闇々と八石五斗の無明妄想の重荷を建れ々々積載ていかめしげなる貌曲して、あたりを拂つて乘連々々打通り給ふは近頃以て殘念なる風勢あらずや、かく大切なる場所をば遣過して我々は仕官の身あれば座禪などする暇隙は勤の内は存じも寄ぬ事なるぞあど宣ふ人々は、海中に在乍ら水を尋ぬる心地こそすれ、四十二章經には人に二十の難あり、豪貴にして學道難しと、誠なる哉、王侯より庶人に至るまで、榮耀富貴の人々は數限も無事に侍れど、來生の苦輪を恐れ出離の要道を尋ね求むる人々は世界を一掃して一人も見え侍らず、是定めて金口の所說に違はじとの心あるべし、只富貴の上にも富貴を貪ぼりて足る事を知らず、榮耀の上にも榮耀を求めて飽事もなき世の中に何の善緣ぞや、幕下のみ獨富貴を見る事空華の如く、榮やうを見る事夢幻に等しく、常に無上の大道に賢慮を傾け、予が艸廬を顧み給ふ事既に三次、昔し照烈の武侯が艸廬を顧み給ひしに等し、彼は三國を並さん事を圖り、此は三界を越ねん事を求む、その趣きは同じといへども、志

は大に異なり、昔し武侯は鋤を棄て、命を委ねて以て三顧に答ふ、老僧豈に三顧を報ずるに片言を惜まんや、如何なる法理を書贈りてか幕下勇猛の精神を增長し、圖ずも宗門向上の大事を透過し、怡悅の眉を開き給へかしと祈る許りに、かなはぬ文章にて斯まで書續けたるにて侍り、去ながら宗門向上の大事は中々文字言語の力にても誘引すべき事にし侍らず、然れども修行の趣向錯まり給はずば自然に大事に契當し給はでやあるべき、專使一昨烏、急に回鞭を執る、貴答を裁するに暇あらず、頻りに廢禮の緩怠を恐る、幸ひにして昨日宜顗盧原に歸る事を告、歡踊に堪ず、押へ留て鄙酬を修す、睡らざる者一夜、晩陰より書して天明に至れば醜書既に五百行を得るといへども、猶情實を盡す事能はず、老來諳記の力無うして前に書しけるを後又書し、始め演けるを終りに亦演ぶ、字々烏焉多く、行々魯魚の差ひあれども、再看するに暇あらず、裁封して以て顗が歸袖に附す、恰かも楚鷄を籠て丹山の鳳なりと稱して王侯に進むる者に似たり、電照の後請ふ丙丁童

に與へて彼をして祕重せしめ給へ、若し又書中取るべき處あらば再び淸書して以て進献せん、幕下書記の人々に命じて繕寫三五冊年少顯發の近習三五輩、及び和田國堅が輩に分ち與へて時々に熟讀せしめ、閑暇の日は幕下の股肱、堤中澤の人々及び故老の舊臣良醫六七輩を召され圍み座して聽受せしめ、幕下も亦蒲團上に且聽且つ睡つて道情を保養し給ひ、半日の餘閑を樂み給はゝ法喜禪悅の境致自然に現前して、四王忉利の歡樂、夜摩兜率の勝界も亦羨むに足ず、況や世間穢濁充滿の宴會、輕浮傲奢の逸遊、八音耳を蕩かし、萬舞眼を昏す底の無慚無愧の幻戯をや、豈に顧みるに足んや、此趣きを以て能々勘辨これ有て、近習をも外樣をも我八萬の大衆なりと思して、密々に誘引し給はゝいつしか上求菩提下化衆生の本願に契つて、塵中衣冠希有の善知識、誰か知ん劍を帶し鞍馬に跨つて往來しながら、時々に諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは、然らば即ち强將下に弱兵なしと申す事の侍れば、龜氏慶喜身子滿慈等の有力の武臣は野村田村等の人々を初め、旗

下には幾人も出來侍るべし、萬一天下の事故あらんに、大將も諸卒も通身一團の眞元氣百騎を率して萬騎に對すといへども從來生ある事を見ず、豈にそれ死あるべけんや、恰も鐵石を突立て行が如し、靜なる事山嶽の如く疾事驟風の如し、向ふ處破らずと云ふ事なく觸る處碎かずと云ふ事なし、譬へば保元平治の亂軍中に在とも無人の曠野に立が如けん、それこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ、君恩と法恩と並べ流て士卒を撫す、誰か幕下の爲に身命を惜まんや、生死の恐るべき無れば涅槃の求むべきなし、十方を目前に消融し、三世を一念子に貫通す、皆是かの正念工夫の力に依れり、かくの如ある時は士敬し民懷き、君仁に臣正し、農に餘の粟あり婦に餘の布あつて、上下ともに道を好んで、國脈泰山の安きが如く萬世を經て衰滅なけん、然は則ち人間天上の善果これに如べからず、宰官身得度者、即現宰官身の大士は豈にそれ異人ならんや、宍賢。

延享第五戊辰暦仲夏二十五蕚

遠方の病僧に贈りし書

便の度毎に貴書並に傳語、者回欽禪人便に又々芳書、殊更野外珍らしき水沈一封親切の至りに候、貴兄事貴境へ飛錫致され候も吾等勸め申し侍れば何とぞ道業怠慢なく囲地一下の勸喜をも得られよかしと好便り待ち入候處に、夏頃より氣分惡く今程延壽堂に入れ候旨、旦夕案じ暮し候、者回、欽禪人物語りには左程の事にもこれなく、發足の二三日已前に入堂致され候由如何許り嬉しく存じ候、氣分は如何樣の重病沈痾なりともそれは世間に打任せて、自分は隨分正念工夫肝要と心がけこれあるべく候、病中苦患の間に仕拔たる修行は他後如何樣の逆緣に逢ても退惰これなき物の由、承はり及び侍り大切の時節ぞと思して努々油斷これある間布候、三十年前去る老漢、病中の僧に對して物語りせられけるは、

世に智慧ある人の病中ほど淺猿しく物苦き事はなき事なるぞや、智慧ある儘に來方ゆく末の事ども際限もなく思ひ續け、看病の人の好惡を咎め、舊職同伴の間闘を恨み、生前には名聞の遂げざるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、鄕里を思ては羽翰の生せざるを憤り、神明に祈りては感應のおそきを嗔り、目を打塞ぎて臥居たるは殊勝に物靜かれども、胸中は九國の合戰よりも騷しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に八石五斗の物思ひなるべし、かく病狂れ死したらんには後の世の有樣こそ推量らるれ、物思ひして藥にも養生にもなるためしならば吾々も打より手傳ひて物思ひ得させんなれども、痛く物思へば心火逆らひ上り肺金痛み費へ、水分枯渴し寒熱止事なく、自盜の二汗は次第に繁くて果は命根も亦保ち難きに至る、是皆平生の志行懶惰にして少し許りの病を妄想心の手傳ひて夥しくそだて上たるものなり。然れば病に害せられたるにはあらず、妄念に食殺されたるなるべし、寔に妄念は虎狼より恐ろしきものあり、虎狼は戸牆さしたる内へ

は入事は叶はぬものなり、妄念の狼は坐禪靜慮の床の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入奴なり、或病人はほろ〳〵と打泣て、吾等程薄福なる者はなきぞとよ、偶々に受難き人身を受け、貴き僧形を得ながら辨道の功をも積ず、佛道の光をも見ずして朽果んずる事の口惜さよなど泣口說たるは殊勝に愛らしけれども、是も懈怠油斷の大不覺者のおれの果なるべし、大凡辨道工夫の爲には病中程よき事はこれあるべからず、古來賢達の人々の巖谷に身をよせ、深山に形を隱し給ふ事は世緣を遠ざけ塵務を捨離して道業純一にはげみ勤んが爲なり、然るに病中を除いて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず、病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ、使僧知客の應對を省き廣衆雜話の喧襍もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豊儉を見ず、死活は天運に投かけ、饑寒は看病の人に打任せて、只狗猫ゑ〻惱伏たる體にて何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻死も亦夢幻、天堂地獄

穢土淨刹悉く抛擲下して一念未與已前萬機不到の處に向つて是れ何の道理ぞと時時に點檢して正念工夫の相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打越悟迷の際を超出して金剛不壞の正體を成就せん事これ眞箇不老不死の神仙ならずや、人界に出生したる思ひ出ならずや、圓虛方袍の威德ならずや、佛道微妙の靈驗ならずや、眞正參禪の人の前には吉凶榮辱逆緣順緣盡く道業を助くる糧となり、懈怠惰弱の人の前には假初の塵事芥子許りの病氣も夥しき障りに仕なして果は宿業のわざなり般若に緣こそなけれなど、種々の道理をつけて遠からぬ般若を遠ざけ根もなき業障を種そだてゝ一生を錯る程の苦々しく情なき事はなきぞとよ、古來より重病を受ゑながら疑團打破の人々は間多き事なるぞかし、中比去老和尙の重き腫物を受給ひて背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて目もあてられぬ病惱なりけるに湯藥食事進め參らするより外は人をも近づけ給はで目を打塞ぎて惱み伏し給ひけるに、ある時法眷の人々兩三輩見來りて見問上りける處へ外療人來たりて土肉とらんとて

膏藥に藥加へ參らせたれば今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらん、かゝる貴き御身に心なき腫物の出來りて日數多く惱ませたる御いとしさよ、去にても今日よりは愈肉の上りて目出度快氣ましまさんを待ち奉る許りなるぞやとて撫勞り申ければ上人は濃く寢入たる人の、目打覺たる御顏ばせにて人々はよくこそ見え來り給ふもの哉、包みはつべき事からねば物語して聞せ申すべきぞ、誰々も近寄給ひてよ、扨も此度の病惱は愚老が爲には貴き善知識なるぞや、腫物の蔭にて二十年の非をしり、四十年の素懷を遂たる事の嬉しさよ、重病受ざりし已前は悟に事缺たる事も無、修行に不足もなき境界ありと思ひて修行も打捨臆面もなく供養など受く會釋もなく起居振舞けるが思はずもかゝる重痾に沈みて五體も煎あぐるが如く骨節も碎け離るゝ許りなれば氣遠く心塞りて黑繩衆合焦熱叫喚の苦患を纔に形體に集め上せたる心持にて悟も見解も何地へや行ぬらん、半點の力をも得ずして殘るものとては想念と苦痛とのみなりければ、あゝ口惜、かく惱み苦み死したれば

とて誰恨むべき事にしも非ず、迚も助かるまじき命なるに是より正念工夫に取掛りて苦惱や勝べき工夫や勝べき心の長の及ばん程は責戰はんずものをと思ひ定めて、傑烈の大志を憤起し勇猛にはげみ進けるに一度も二度も苦しく絶入る心地しけるが打返し取直して間斷もなく進みける程にいつしか戰ひ勝て晝夜のさかひもなく寐寤の隔もおくて終には打成一片の工夫現前して此十四五日以來は想念も苦惱の雲霧などのはれ失たる心持にて大安樂なるのみに非ず、眞正生死不二佛魔同體の眞理に契當し唯有一乘金剛不壞の奧義に徹底したるぞかし、今日より後は如何樣の逆緣重障なりとも菩提を妨ぐる事はあらじと覺ゆるぞ、人々も少し許りの會處得力あらんを賴み給ひて、茲はの時に至つて愚老などが如く興さまし給ひそ、返々も健かならん時正念工夫怠り給ふべからず、賢くも煩ひける事よ、箇程目出度事や有べき、思へば〳〵此度の腫物は愚老が爲には上もなき善知識ならずや、然らば即ち如何なる供養をもし如何なる讃嘆をも述度思ふに次第に愈行事の名殘

惜さよと打笑給ひけるを其時隨侍申しける僧の物語しけるを聞たるぞかし、又或眞言家の驗者かりと聞に給ふ法師の御房の重き傷寒に惱給ひて夜晝の分ちもおはさで、うなりどめき給ひけるを弟子の小法師の小黠氣あるが打聽てあの御房の日頃の氣情にも似給はず、吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はで、あのうなり、叫び給ふ事よとて打笑ひければ上人も打笑て、やをれ小法師よ三日已前のうめきは叫喚泥犁の苦痛、三日已後のうめきは最大微妙の法音かるぞ、慢り笑ひて誹謗正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ小法師かへして左許り早く手の裏翻す如くに成佛はし仕給へるにやと申しければ、さればとよ佛も懈怠の衆生の爲には涅槃三祇にわたり勇猛の衆生の爲には成佛一念に在と說給へるぞや、去し頃病苦の堪難くて次第に性體もおく惱み行まゝに來生の業苦を恐れ、生前の行相を悔て泣明しけるが思ひ直して大日不二の觀念に入り目を閉ぢ齒を切りて間もおく勤め進みたれば貴やな、いつしか病惱は搔拭ひたる如く打消わ病臥たる形骸は瑜伽微妙

の寶印と現じ圖らずも金剛不壞の正體を成就し此うなりどめく聲は三密不思議の大陀羅尼と冥合し寢たる床は毘盧本有の大道場と打ち成り四重圓壇の大曼荼羅は心上に嚴然として目前に粲爛たり、嬉しや忽ち有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛の素懷を遂たるぞや、小法師原が聞知べき事にしあらねどかく有難き慧日に逢たる目出度さに物語りはするぞかしとて、嬉し泣に打泣々々語られけるが後には道業比類もなくおはしける由、其外異國にも祿宏の湯厄蒙山の痢疾何れも病に依て道心進み給ひける人々は間多きぞかし、和僧達は左許りの小病にけぎたなく云甲斐もなき有樣かな、などかは昔の人々に劣るべきや、只今死なんずとも正念工夫目出度て死に給んには眞の佛祖の兒孫たるべきぞ、かくいへばとて重病受んを待つて參禪工夫せよとにはあらず、けなげに健かならんずる人々も日夜に怠らず、彼人々の如く用心したらんには十人は十人、百人は百人ながら學道成就せざる事はあるまじきぞ、兎にも角にも正念の工夫程貴ぶべく重んずべき事はなき

事なるぞとよ、正念の端的未だ悟入なからん人々は眞正の導師に見ゐて第一に決定し給ふべし、決定あらん後は四劫儀の間正念工夫打失せざるを第一とすべし、大慧禪師曰く『那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處、一切處に於て是の如く點檢せよ』と、これは是從上の諸聖正念工夫親切の樣子なり、これ則ち萬古不易の正修なり、是を直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人とも云ふなり、此の眞人は空劫以前空劫以後、少しも病氣なく鼻もしみたる事はなき人なるぞ、是を法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり、南嶽の隨意願行に昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音と釋し給へるも此の眞人の事なるぞかし、此の人を供養し此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば何れの病か治せざらん、何れの道か治せざらんや、佛法中には病疲れたる老女、瘦悴けたる老夫なりとも正念工夫間斷無んば無病堅固の有力の人とす、縱ひ七尺八尺の身財あつて身子の智圓かに滿慈の辨饒にして三經五論を講じ得、五家七宗の奥義を究め盡

して力周鼎をあげ、眼寰宇を空じたりとも正念工夫なからん人をば臭爛膨壞の死人とする事なり、あひかまへて容易に心得べからず、寔に保ち難く寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや、末代の悲しさは人毎に名聞の心強く利養の心盛にして道心ありげに見せかけ莊り立れども、正念工夫決定の人は得難き事なり、增て正念工夫相續不斷の人の求るに千人萬人が中に一人もなき事なるぞ、老僧十三歲にして此事ある事を信じ、十六歲にして娘生の面目を打破し十九歲にして出家三十五歲にして此山に遁居す、今年六十五に垂とす、中間四十年萬事を放下し世緣を杜絶し、專一に相守て漸く五六年來、眞箇正念工夫の相續は得たりと覺えるぞ、檀那施主に輕薄追從し利養名聞を希望貪求しながら參禪工夫せんとは寔に片腹痛き事なり、往々に師學ともに常住の潤澤を榮耀とし多衆鬧熱を宗風とし、辯才利口を智慧と思ひ衣食の結構を佛道に充つ、尊大美麗を道德とし人の信仰を法成就の時なりとす、悲みても尙悲むべきは得難き人身を名聞の奴婢に責使ひ、上

もなき佛心をば妄緣の塵埃に吹埋ませて此の招請、彼この供養には似合ぬ綾羅絹帛を惜げもなく著飾り、得もせぬ禪道佛法を會釋もなく說散し、無智の白衣に對しては孔明子房が辯口を逞うし、苦汗の財施を掠め取には目連鶖子の神通を得たり、暫時の名利を偸み求めて因果を信ぜず報應を恐れず、臘月三十日狐燈獨照半生半死の際に到つて泣うめき、七顚倒八狂亂、手脚の置處なく、あがき死にして弟子門徒の面ぶせになり給はんは違ひはあるまじきぞ、今の人々の心ばへにて禪道修行の人といはゞ何國の唯か佛祖ならざる者有べきぞ、不思議の因緣にてかかる物すごき處に來りて一夏をも明し給ふ者を何しに惡き事敎へ申すべきや、世間は知ず老僧が破屋の內には甘く心易き佛法はなき事なるぞ、只兎にも角にも修行者は吾身を高ぶり吾身を重んじ吾身を最負する程惡き事はなき事なるぞや、一年狼の多く來りて此麓の里へ寃をなせし時に愚老は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ、是は彼等に取圍まれ耳の根咽ぶへなど吹嗅んずる時に正念工夫間斷

ありや否をためし試みん爲なり、蛇にもせよ水神にもせよ男子たる者の思ひ立ち取かゝりたる事を遂ずや置べき仕果ずやあるべきと思ひ定めて如何なる飢寒をも忍び堪へ如何なる風雨をも堪凌ぎ、火の底に入り氷の底に浸りても佛祖の開き給ひたる眼を開き佛祖の到り給へる田地に到りて宗門の大事を參歇し末後の奧義を徹了して十方參玄の衲子を惱害し、釘を拔き楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと、歷劫不退の大誓願を憤發し給はゞ病ひ何れの處にか湊泊せん、古德の修行に一人として疎かなるはなき事なれど中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歷給へるは取別貴く覺ゆる事なり、油斷し給ひたらば果して相似の修行者になり給ふべきぞ、但しその相似とは似せ者と云ふ事なり、唯やの人か不足なき身に似せ者と成んと思ふ人はなき事なれども好法友の手引を受給はず道心深からずして少し許りの會所などを賴みて口を利、人にも貴ばれ給はゞ、見事なる似せ者なるべきぞ、操履を愼み正念を守りて事足り給はずば如何なる野の末山の奧にても飢

死寒え果給ふべし、黄金は菰に包みても黄金なれば貧の佛祖の兒孫神明掌を合せて尊信し龍天頭を低て擁護すべきぞかし、諂ひ屈て財産を積み重ねて千僧の葬儀七寶の莊嚴あつて幡蓋目を奪ひ道場心を驚かしたりとも閻王怒眼を張、牛頭鐵鞭を撚つて相待んは苦々しかるべきぞなど、戌の上刻より丑みつ頃まで物語りせられけるを傍に侍りける両三輩只片時許りの心持にて感涙肝に銘し慚汗肌を侵し侍りき、其後病中などに此物語りを思ひ出し侍れば忽ち慚愧の心起りて病氣も輕く成行樣覺え候故、あらまし書付け遣す事、延壽堂中の人々病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り、去乍ら如上は正受老漢平生受用底の施藥にして甚だ一味單方攻擊の冷劑なり、茲に又一方あり、尤も虛弱の人に宜し、心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり、上昇を引下げ腰脚を温め腸胃を調和し眼を明かにし眞智を增長し一切の邪智を除く事大に効あり、輭酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五釐、放下着一斤、

右七味忍辱の汁に浸す事一夜、陰乾して抹す、例の通り般若波羅蜜を以て調錬し丸じて鴨卵の大さの如くならしめて頂上に安着す、初心の行者は藥種如何、斤量如何を觀ずべからず、只色香微妙の輭酥鴨卵の大さの如くなる者我頂上に頓在すと觀ず、病者此藥を用ひんと要する時、厚く坐物を敷、脊梁骨を堅起し目を收めて端坐し除々として身心を淘定めて須らく思惟すべし、大凡生を保つの要、氣を養ふにしかず、氣盡る時は身死す、民衰ふる時は國亡るが如し、此語を三復し了つて正に此觀を成べし、彼頂上に安着する輭酥鴨卵の如くなる者、其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤し浸々として潤下し來つて両肩及び雙臂両乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁臀骨、次第に沾注し將去る、此時胸中の五積六聚疝癖、塊痛、心にしたがつて降下する事水の下におもむくが如し、歴々として聲あり、遍身を流へ潤して下つて雙脚を温む、足心に至つて卽ち止む、行者再び此想念をなすべし、彼浸々として潤下する所の餘流積り湛へ暖醺して恰も世の良醫の種々妙香の藥

物を聚め是を煎湯にして浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を漬浸が如しと、此觀を作時、唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞、身根妙好の輭觸を受、身心共に調適なり、忽ち積聚を消融し、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を增す、若時々に此觀を成熟せば何れの病か治せざらん、何れの仙か成ぜざらん、此は是養性の祕訣にして長生久視の妙術なり、此方始め金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に到つて大に勞疲の重痾を治し、且其兄陳秦が必死を救ふ、澆末難遭の靈方なり、宜哉此道今人知得する底希なる事を、老僧中頃道士白幽に聞、効驗の遲速は行人の勤と怠とに在る而已、怠らざれば長壽を得、道ことなかれ、鵠林老去つて大に老婆禪を說くと、恐くは知音の一見して手を拍して大笑するあらん、何が故ぞ、「亂に臨まざれば貞臣の操を見ず、財に臨まざれば義士の志を知らず。」

法華宗の老尼の問に答ふる書

老夫當秋より法華講演の刻み、心の外に法華經なく、法華經の外に心無と申しじたりしを聞及ばれ、怪き事に思して書通を以てなりとも、右の道理を申し越し其外にも有難き事どもこれあらば書付遣し候樣にとの御事、これによつて大略の趣書付進じ候間何遍も繰りかへし、披覽致され能々得心これあるべく候、成程我等常々申し談じ候通り心の外に法華經なく法華經の外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし、是卽ち決定至極の法理にて愚老に限ず、三世の如來も十方の賢聖も極處に到つては皆々かくの如く說給ふ事にて法華本文の大意は大段此等の趣を宣給ひたる事にて、此外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども皆權敎の說にして方便の間を出ず、至極に到ては一切衆生と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と說給ひたる、是卽ち佛道の大綱なり、大凡世尊一代頓漸祕密不定の法門有て無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其中の至極の旨は法華一部八卷の中に促り法華一部六

萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に促り妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り妙法の二字は心の一字に歸す、心の一字は却て何れの處にか歸すとならば『兎角龜毛別山を過ぐ畢竟如何、限り無き春を傷しむる意を知らんと欲せば盡く針を停めて語らざる時に在り。』さる程に妙法の一心は展ぶる則んば十方法界を含容し、收る則んば無念無心の自性に歸す、此故に心外無法とも說給ひ、三界唯心とも諸法實相とも說き給ひぬ、其極處に到つては法華經と云ひ無量壽佛と云ひ禪門には本來の面目と云ひ眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ、皆是一心の異名なりと覺悟致さるべし、然るに妙法蓮華經の五字一心の源を指とは如何なる證據かあるとならば、取り直さず直に此の妙法蓮華經の五字よきたしかなる證據にて侍り、如何となれば妙法蓮華經とは一心不思議の德を讃歎したる題號にて一心本具の性德を指顯したる言葉なり、仔細は大凡手蹟にもせよ、畫圖にもせよ、誰々は琴の妙を得たり、誰々は琵琶の妙を得たり

と云れんずる人も其妙とは如何なる場所を申す事に侍るぞと問れたらん時に如何なる辯才利口の人にても中々言葉に演る事は叶はざる事なり、去程に父子不傳の妙とて吾大切なる一子にさへ敎ふる事は能はず、妙處に到つては吾とても覺ず知らずの處より働き出る事なり、人々具足の妙法の心性も左の如し、只今此文を披覽し或は笑ひ或は談じ、緒環の絲繰出す如く果しもなく五人に逢ても十人に逢ても少しも間違もなく働きもて行事不思議なる有樣ならずや、然るに何物か斯の如く自由には働く事ぞと內に向ひて尋ね求るに、聲もなく臭もなし、然ば一向に頑空無記なる物にして木石の如くなりやと思へば例の通り、千變萬化自由自在にして有と云はんとすれば有に非ず無と云はんとすれば無に非ず言語道斷脫洒自在なる處を假に且く妙法とは名付給ひたる事なり、蓮華とは蓮の泥土の底に有つても少しも泥土に汚されず、妙なる色香を具足して失はず、時を得て麗しく咲出るは此妙法の佛心の衆生に在つても穢れず滅らず佛に在つても淨からず增さず、佛も凡夫に

て在　時は一切衆生に少しも遮はせ給にて五欲の泥土に汚され給ふは左ながら蓮の泥中に在るが如し、其後雪山に於て、本具の心性を發明し給ひて稀有なる哉、一切衆生如來の智慧德相を具すと高聲に唱へ給ひて頓漸半滿の諸經を說き宣三界の大導師と成給ひて梵天帝釋に尊信せられ給へば蓮の泥中を出で麗しく發けたるが如し、蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲出すが如く佛も無量恒沙の法を宣給へども、外より持來り給ふに非ず、凡夫にておはせし時屹度具足し給ひし佛性の有樣を其儘に宣給ふ者なり、衆生にておはせし時も成佛の本懷を遂給ひて後も一心の妙法は少しも添減なきが如く、蓮の泥中にありし時も咲亂れたる夏も少も變遷なきに等し、故に假用ひて且く一心の妙法に譬へ給ひたる者なり是卽ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名づけ給ひたる證據ならずや、さて又經とは常と云へる字義にて常住佛性の義を顯し給ふ者なり、常住佛性とは此心性は佛に在つても增もせず、衆生に在つても減じもせず、天地と同根萬物と一體に

して曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指て、經とは說給ひたるなり、然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讚歎し給ひたるにて畢竟一心の異名なり、一實二名餅を歌賃と云つた程の事なり、然れば眞實の法華經は手にも把れず、目にも見えざる者なるを如何にやは受持すべきぞ、如何樣に心得たるを法華經の行者とは云べきぞとならば、蓋し三種の根機ありて下根の行者は黃卷赤軸を把へて讀誦書寫解說し、中根の行者は自心を觀照して此經を受持し、上根の行者は眼に此經を見徹し自心の面を見が如し、是故に涅槃經に曰く『如來は目に事性を見たまふ』とは是なり、法華經の行持は大乘至極の眞修なれば中々容易の沙汰にし非ず、易き事は甚だ易く、難き事は甚だ難し、去程に本文にも此經難持、若暫持者、我卽歡喜、諸佛亦然と說給ひて至極大切の行持なり、天台の智者の曰く、「手に卷を執らず、常に是の經を讀み、口に言音無けれども遍ねく衆典を誦し、佛、說法せずして恆に法音を聞く、心に思惟せずして普く法界を照す。」

と是眞正誦經の樣子なり、試みに問ふ、卷を執ずして誦する底是那箇の經ぞ、自心、妙法に非ずや、思惟せずして普く法界を照すと是何物ぞ、眞正の蓮華に非ずや、是を無字經と云ふ徒に黃卷赤軸のみを把へて法華經なりと偏執するたくひは彼藥帖上の記を舐つて藥なりとして病を治せんと計る者の如し、大に錯り了れり、若人此經を持んと欲せば十二時中胸中一點の缺曇りもなく、不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云ふ、去程に拾得子の偶にも『無爲の理を識らんと欲せば、心中、絲をも掛けざれ』と、かくの如きの正修は三世の如來も一切の智者高僧も、此處より大悟得道し給へる事にて萬古不易の大易なり、一念不生前後際斷頓悟成佛の直路なれば如來の此經難持と宣給へるも理り至極ならずや、大凡三敎の聖人も實處に到つては大段同じ、其進修の淺深精麁に依つて得力の高下はあるべけれども最初の一歩は趣き等し、儒門には此處を至善といひ、未發の中と云ひ道家には虛無自然といひ、神家者は高間ケ原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事と

す、眞言にては阿字不生の觀法と云ふ、家々の祖師達の座禪をすゝめ誦經を勸め給ふも誦々唱々て一心不亂純一無雜の田地に到らしめん方便ならずや、永平の開祖も行持あらん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なりと宣ひき、寔にたま〳〵受難き人身をうけながら、何の行持の心もなく逢難き一生をやみ〳〵と犬猫などの何の覺悟もなくて朽果つる如く苦しかりし三塗の舊里へ懲もなく立歸らんずる事口惜く淺猿き境界なりと涙を落すべき事なり、然るに難き事は甚だ難しとは我得て疑ふ事なし、易き事は甚だ易しとは如何なる故ぞとならば若人此經を手を放て行往坐臥にやす〳〵と持んとならば、誓つて一回法華眞の面目を見届くべしと願ひ給ふべし、法華眞の面目を一見したらん上は咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情、悉く皆な妙法蓮華經と現成する故に十二時中此經と冥合す、何ぞ別に持つ事を用ひんや、眞の法華を一見せずして法華經を持たんと擬する譬は、ばこ〳〵に一人あらんに手に一椀の水を擎げて、こぼさじ

動さじと晝夜に慎み守りて養ひ增さんと願が如し、縱ひ一生擎げ守つて十成なるも養ひ增す事は存じもよらず、自家の飢渴も亦救ふ事能はず、彼二利の願行に於ては望を其間に絕ものなり、何の用を作にか堪んや、若又眞の法華を一見して此經を持つ人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し忽ち三萬六千頃の煙波と混合し、德澤を大湖と共にして飛ぶ者走る者翔る者蠢く者、同く共に行て呑まんに盡る事なし、眞の法華を見ざる人は一椀の水を擎る人の如し、他を利する事能はざるのみに非ず自己も又利する事能はじ、眞の法華を一見する人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し、覺えず諸佛の大寂滅海に投入して諸佛の眞法身戒定智慧と冥合して忽ち賴耶の暗窟を擊碎し、大圓鏡光を放出して塵沙劫を經て大法施を行せんに終に乏しき事なし、一見法華の功德の廣大なる事上下四維等匹なし、人あり一切諸經論を熟讀せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、無量の寶塔を修造せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、百千の佛を造立せんよりは須らく眞の法華を一

見すべし、三界の秘密を學得せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、彼黃卷赤軸のみを捉へて法華經なりと偏執せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは須らく眼に一回眞の法華を見るべし、是實に成實不壞の高談なり、如何して法華眞の面目を徹見すべきぞとならば、先須らく大疑團を起すべし、何物を指てか法華眞の面目とはするぞ、自己本有の妙法の一心なりと聞からに自心を見るにしかず、自心とは如何なるものぞ白き物とやせん、赤き物とやせん、是非〳〵一回見得すべきぞと猛く甲斐〳〵しき志を震つて大誓願を起して晝夜に究め見るべし、自心を參究するに行持は樣々多き中に法華經の行者ならば法華三昧の行持に越たる事や侍るべき、法華三昧の行持とは今日より思ひ立て憂につけ、つらきにつけ、悲きにつけ、嬉きにつけ、寢ても覺ても、起ても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經〳〵と間もなく唱へらるべし。此首題を杖にも力にもして是非とも法華眞の面目を見屆くべしと深く望をかけて

唱へらるべし、願くは出る息、入る息を題目にしてほしき事よと隨分親切に斷間もなく唱へらるべし、唱へ〳〵て怠らずんば久しからずして心性たしかに大石などを淘居たる如くにて安住不動如須彌山の心地はほのかに覺えあるべし、其時にすて置ず、隨分唱へらるべしいつしか聞及し正念工夫の大事に契當して平生の心意識情都て行はれず、金剛圈に入るが如く璃瑠瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なる事なけん、纔かは蘇息し來らば覺えず、純一無雜打成一片の眞理現前して立處に法華眞の面目に撞著して忽ち身心を打失し本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして推ども去じ、此時に當つて天台の法性寂然、寂而常照の實所に投入し、眞言の阿字不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒は冥合し、淨土の卽心往生極樂報土の素懷を遂、水鳥樹林念佛念法念僧の妙莊嚴をまのあたり見屆け娑婆卽寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の田地に至ちん事、毫釐も相違あるべからず、然らば則ち人中天上の善果何事か

これにしかんや、是卽ち三世の諸佛出世の本懷なり、一遍の題目は禪門一則の話頭と其功異なる事なし、此等の趣き三世十方の賢聖扶桑八萬餘座の神慮もおはする者を老僧が毫髮ばかりもあやぶむ處あらば何しに罪作りにくだ〳〵しき事を書贈り侍るべきや、少しも疑ひ給ふべからず、此上猶又怠り給はずば禪門にいはゆる左手を握て中指を唆等の心地も次第に明かなるべし、今時往々に道、參禪無益なり話頭了じて什麼かせん、卽心卽佛の直指なれば念の起るをも愁ず、念の止たるをも喜ばず、山賤の白木の合子、只生れ付たる自性の儘なるがよきぞ、漆つけねば剝色こそ無れとて日々徒に盲龜の空谷に入るが如くし去つて以て足りとす、此は是天竺の自然外道の所見なり、恁麽にして佛心向上の宗旨なりと稱せば七村裏の土地も亦掌を撫して大笑すべきぞかし、何が故ぞ、これ總に長沙の謂ゆる識神を認得する底の癡人ならずや、嚴に賊を認て子となす、終に元淨明の體を知る事能はずと呵せられしは此等の部類なり、殊にしらず如來は四果の聖者の諸

漏己盡し、我法の眞理に達し神通具足し名稱普へ聞え給ふをさく禪を知りとは許可し給はず、故に經に曰く『我が弟子大阿羅漢この義を解する能はず、唯大菩薩衆のみ有つて應に此の義を解すべし』、とも說給へるものを見性の功さへなくて、妄に自ら尊と稱す、是何の心ぞや、人は只兎もあれ萬緣を抛擲して唱ふるに越たる事はなき事なり、去ながら題目ばかりの利益なりと偏執し給ふべからず、眞言に限らず、淨土に限らず、何れも優劣あるべからず、淨家の人々は專稱唱名の功力に依つて是非々々一回唯心の淨土己身の彌陀の妙相を見屆けでや置べきと決烈の大志を憤起し頭念を救ふが如く間もなく唱へ進みたらんに佛も去此不遠と說給ひたる者を、などや七重の寶樹八功德池の有樣を見屆けずやあるべき、眞言の人人は陀羅尼微妙の威力に依つて是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと、禪門に於いて一則の話頭を擧揚するが如き精進勇猛の憤志を震つて繰たらんに高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者を、などかは彼金剛不壞の正體を磨出さずや

有べき、何れも死後を待つて利益に預らんと打延し給ふは不覺油斷の至り覺束なきものぞかし、遠き事とな歎給ひそ、八重の潮路を隔てたる唐土天竺の事を見給へ聞給へと云にこそ、遠き事とは歎くべけれ、自心を以て自心を見る吾瞳を以て吾瞳を見るより近き事には侍らずや、深き事とな恐れ給ひそ、九淵の潭の底、千尋の海の中なる物を見給へ聞給へと云にこそ深き事とは恐るべきなれ、吾心を以て吾心を見る、吾鼻を以て吾鼻を嗅より近き事には侍らずや、世は末世なれども法は更々末世ならず、末世なりとて打捨顧み給はずば寶の山に入りながら自ら飢凍を苦しむか如し、末世には去事は及ばぬ事とな恐れ給ひそ、遠は惠心院の僧都、近は赤澤の即往、山城の圓愚、何れも稱名の力に依つて右の素懷を遂給ひたるぞかし、法然上人も此望は深くおはしけれども先達なき故に翼短うして長空に翔らざる心地なりと宣ひき、末法澆季の驗にや、近代惡き風俗起りて出家も在家も見習ひ聞習ひになりて今時妙法の佛心などを見んと計るは鰻が木にのぼらんと

する心地なるぞとて闇々と一生を過行事淺ましき心ばへならずや、是は左ながら過分の田地を讓れたりし百姓の子共數多在べきに其内一人輭弱不肖にて然も口利て少點しげなるが曰く、今時吾々風情の柔者共が先祖昔の人々の眞似美して農業耕作などして大勢の妻子眷屬など養育せんと計は及びもなき事なり、それは左ながら家鶯が鷹の眞似して鶴と組で落さんと羽づくろいするが如く、跛龜が鯉魚の眞似して瀧上りせんとて頭さし伸るに似たる事ぞ、片腹こそ痛けれ、左しもて行たらんには必ず鎌にて水をなん呑べきぞ、存じもよらぬ事なるぞとよ、つもりても見よや和殿原や我等如きの疲孩子者どもが、芝野を見が如なる草生茂りたる田地を草刈切立、耕し水載、鉏上種子かし早苗し、植つけ耘り、刈干ときあげ、糠すり繩なひ、菰あみあげ高あぐらして詠め見んする事、あだや通途にて遂らるべき事かは、それは昔物語なるぞ、あらぬ樣なる端立なるぞや、夫よりは安々と拔入袖して世渉るすべはある事ぞや、かなたこなたあるきても五日三日苑の日は送

らるゝぞかし、肩有つて著ずと云ふ事なく、口有つて食ずと云ふ事なしと聞ものを、殊更何某の國、何某の侯は仁德厚おはして我々如き者をば扶持し給ふと聞なるに、果はそこへなり行べきぞ、斯許りよき事のあるになに歎く事の有べき、手足をなん動して自力にて口過さんとかゝるは又なき僻事なるぞ、心慮ひなしそ、初より下手に組むがよきぞ、働だてなしそ、かせぎ振見するな、一二枚ある古着も脫すて菰をなん被りて我々は告る方もなく居ど立どに迷ひたる貧窮下賤の者に侍り、哀れ助け給ひてよと打泣々往たらんに慈悲深き世の中なるものを、など口一つばかりすぎ兼る事のあるべき、少しも疑ふ心なうて、兎せよ角せよと敎られて悅び勇て誰々も兼てより斯なん思つる事よとて生れもつかぬ貧者に成て一生を送るに似たり、此等の輩を自暴自棄の人と云ふ、臨濟大師は甘つて下劣人と作ると呵責せられたり、是は左ながら魚の水中にありながら我等風情にて水など見んと計は及びもなきことなりと歎き、鳥の長空を翔りながら、今時長空などを見ん

と計るは存じもよらぬ望みなりと悲むに似たり、殊にしらず十方法界の中眞如ならざる國土なく妙法ならざる衆生なき事を、惜むべし、唯心の妙法寂光淨土のまつたゞ中に住ながら生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無間なりと泣悲む事皆是目前に充溢たる妙法の佛心、前後に澄湛たる法性をば及もなき事なり、存じもよらぬ望みなりとて打棄筋なき妄想情識の料簡を頼みて空く暮せるより起る事なり、惜みても惜むべきは、三界無比の妙法醍醐上味の經典なれども、教の如く修行する人なき故に文車に稠載たる世の並々の書籍と共にあり甲斐もなくやみ〳〵と朽果穢土淨刹と見違ひ三塗六趣と思ひ成事歎の中の歎ならずや、問ふ、教の如くとは如何なる教をか指や、四安樂の法門か、五種の法師の行持か、曰く然す方便品に謂ゆる開佛知見道故出現於世の本文、經中の眼目なり、番々出世の如來無量恒沙の法を說給へども何れも一切衆生の佛知見を開かしめん爲なり、然らば佛知見の望なくて如何なる法を行じたりと

も諸佛の本懷に契事は努々これ有べからず、開佛知見とは一心の妙法を發明する事なり、悲みても悲むべきは今末世澆季の世の中なれば、一心の妙法の沙汰はすたれ果て、思ひ〳〵の有樣なり、たま〳〵有るに似たるも此頃は皆々教へ事になりて云甲斐もなき風情なり、大日經にも如實に自心を知るべしと說給ひたるものを願る人さへなけれ、法華經の教に隨はず、妙法は何地に有もしらでうろ〳〵として西ぞ東ぞとて混さわぎに騷廻りて、佛道なりとて月日を送るは、譬へば此に大福長者あらんに、初め多少の艱難を經て限りもなき田地を切開きて爾等も此田地を耕して我如く大福長者になれとて大勢の子供に優劣もなく、過分の田地を讓り與へたりしに、父の教に隨はずして何れも他國に流浪し、人の門戸に傍乞食するものあり、我は鏡とぎなりとて瓦を把て磨行もあり、粟稗の鳥を追てすくみ居るものあり、長者の子なりとて自身は乞食非人の體にて乱りに人を輕しむるものあり、田畑の帳面ばかり毎日繰かへして田畑の有處も知らぬものあり、帳面さへあれば恐る

ることはなきぞとて恣に惡行を行ずるものあり、我は長者の作法を知りたりとて飢渇て作法ばかり行ずるもあり、田畑の有處もしらで晝夜に田畑々々と叫もあり、田地の廣大なるを少し許り見付て大憍慢して婬酒食肉心に任せて乱行なるもあり て、長者の心に契たる子は一人もなきが如し、田地とは一心の妙法を指なり、帳面とは諸經論を云ふなり、人の門戸に傍て乞食するとは、かの開佛知見の大事は自身艱難刻苦して冷暖自知する事なるを末世になりては人の敎を受て正體もなき事を聞覺て是を大悟とする事なり、これは法華經の中の窮子ならずや、方等部には四果の聖者をさへ二乘凡夫と呵責し給しものを、人々の敎を給ふ通りの埒もなくたわいもなく、繩にもかづらにもかゝらぬ事ならば、何しに佛は六年まで雪山に閉籠て皮骨連立し絲を以て瓦を編立たる如く瘦衰へ、蘆すゝきの膝を突貫きて臂まで穿ち拔たるをも覺え給はん、目のあたり雷の落て牛馬を打殺したるをも御覺にましまさぬ程、苦吟し給ひて初めて佛知見を開き給ひたるは如何なる事ぞや、

蓋し佛道も上古は大いに難く今時は大いに易しとするか、且羅葡を煨し芋栗を煮るが如く初めは硬く、後には輭かなるものとするか、今時の易きが是ならば古への難きは非ならん、古の難きか是ならば今時の易きは非ならん、古の難きは苦吟する事は甚だ苦吟す、纔に發轉する時は忽ち賢聖佛祖たり、那邊を透過し今時を透過して毫釐も觸著すれば電轉し星飛ぶ、今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり、望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し、纔に發轉する時は依然として困魚箔に止り、跛鼈甕裏に落つ、今時を透らず那邊を透らず、拶著すれば瞎驢氷稜に上る、今時の易きを取んか、古への難きを取んか、如何に末世なればとていひ甲斐もなき有樣なり、古人も末々は禪法も正體もなく成果べきを知給ひけるにや、妙心を瘡紙に求め正法を口談に付すとは兼て悲み云ひ置れたるなるべし、此事もし紙授口傳にて濟べくば神光の臂を斷ち、玄沙の足を傷ひ、法心は頭腫れ法燈の涙を落す事はこれあるべからず、人は兎もあれ角もあれ、我は是非〳〵晝夜に間もなく

首題を唱へて眞の法華のあり樣を見屆くべきぞと親切にさへ唱へ給はゞ、雪山には入らず頭は腫ずとも、決定必定自性の妙法蓮華は麗しく開け侍るべし、たゞ肝要は自心の妙法を見屆ずば置まじきぞと望み深き程貴き事は無事なり、如來世尊も自心の妙法を見屆け給はざりし間の流轉常沒の凡夫に少しも違ましまさで、生死往來し給ひき、末後雪山に於て自心の妙法を見付給ひて初て正覺を成就し給ふ事なり、瓦を磨とは八識賴耶の無分別識を認て本來の面目なりと合點して、妄念さへ無れば其迹は鏡の如くなる佛心ぞ、只鏡の萬境を寫して鴉は黑く鷺は白く、柳は緑に花は紅に少しも錯らず照せども、毫釐も迹を留ぬ如く時々に勤めて拂拭せよと敎られて晝夜に妄念を拂ふは瓦を磨き粟稗の鳥を逐に同じ、是を識神を認むと云ふ、山河大地を照破する光明の發する事はなき事なり、此類の修行は昔より大唐にも間多き事なり、南嶽大師の馬祖の庵前にて瓦を磨き給ふも馬祖に此の意を知らしめん爲なり、去るに依つて長砂大師の偈に曰く『學道の人、眞を識ら

ざるなゝは、只從前識神を認むるが爲に、無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人となす、』と是故に慈明眞淨息耕大慧等の祖師齒を切つて觝排して親切を盡されし事なり、其外の諸師の有樣は逐一擧するに及ばず、大凡三世十方の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖はなき事なり、是萬古不易の大綱なり、見性とは法華眞の面目を見屆くる事なり、此望なくて種々の事して佛法なりと心得るは船頭もなき大船に幼童多く競ひ乘て何地へよるべき湊もしらで、かなたへ漕が好ぞ、此方へ漕が好ぞとて思ひ〳〵に櫓械推たて昨日は東の方へ潮に隨ひて漕ぎ漂ひ今日は西の方へ汐に隨つて漕ぎ漂ひ終に海中を出ること能はず、其の船中へ案內したる船頭忽ち打乘り磁石を見定め楫を把る時は一日の內にも思ふ湊へ着く事なり、船頭とは見性の大志なり、磁石とは正法の指南なり、楫とは平生の志行なり、如何にして妙法の湊へは漕入べきぞとならば一切の行人は佛を求め祖を求め、涅槃を求め淨土を求めて外へ〳〵と漕出る風情なり、故に轉求むれば轉遠く轉尋ぬ

れば轉遙なり、眞正妙法の行者は卽ち然らず、自己本有の妙法は如何なる物ぞと推究て佛を求めず、祖を求めず、彼妙法は內に在とやせん、外にありとやせん、內外中間にありや、又青黃赤白なりや、是非〳〵一回見屆けずば置くまじきぞと、十二時中一切處に於て間斷なく、猛〳〵甲斐〳〵しき氣槩を推立流石の者が思ひ立たる事を逐ずや置べき、仕果ずやあるべきと寢ても覺ても起ても居ても捨おかず、晝夜に點檢して或時は打返して怠廢に尋る底是何物ぞ何物ぞと尋る爾は是阿誰と進み入る、是を獅子人を咬の法と云ふ、心の妙法は如何〳〵とばかり尋ねもて行を韓獹塊を逐と云ふ、唯兎にも角にも萬事を放下して無念無心になりて南無妙法蓮華經〳〵と唱へ給ふべし、此外別に有難き法理の老僧が書送るべき事ありと思さば上もなき錯りにてこれあるべく候。南無妙法蓮華經

延享第四丁卯曆仲冬廿五日　沙羅樹下老衲書

右管々布、長書、披覽も六箇布待るべけれども、此れを序に菴居の人々も一

覽せらるべければ法施にもなれかしの心にて書續けたるにて候、至極の旨は自心の妙法を是非〳〵見屆くべしと思して絕間もなく首題を唱へ給へとの心にて候。

『老夫此の草書を裁し畢つて竊かに看讀す、時に一僧あり予が傍に在り、是れ予が舊友の僧なり、讀んで法華眞の面目と云ふ處に到つて長吁して曰く、師復た止啼の金葉を掃ひ給ふか、予勃如として曰く何と謂ふことぞ哉、爾吾が草書を以て黃葉と爲る乎、是れ金なり黃葉には非ず、此の書の如きは法華本文の大意を汲んで書す、爾指して以て黃葉と爲す、是れ法華を謗する者に非ずや、誹謗正法の罪累、懺悔を容るゝに所なし、爾那處を指してか以て黃葉と爲るか、僧低頭して曰く今近遠住菴の諸士各々英豪の才を懷いて枯淡を忘れて坐し、軀命を拋つて修す、舊宅を借り廢社に潛んで十年五歲する者は師の惡毒の苦乳を甘つて分離するに忍びざる者なり、今歲狂浪田園を洗ひ粒米を留めず、民家各々妻孥を携へて竊

かに他方に往かんと欲す、予杳かに嗟悼すらく、已ぬる哉鶴林住菴の緇侶、一箇も錫を留むる無く禪苑の荒蕪之に過ぐべからず、近ごろ一僧あり曰く飽煖を探り閑熱を慕うて朝秦暮楚する底の庸常下劣の族は閣いて論せず、眞實辨道、透過を求むる底の舊參の上士は一箇も去らず、其の精進勇鋭前月に十倍せり、五箇黨を爲し十箇絆を結んで此の水邊彼の林下に食せず寢ざる者或は五日或は十日、盡く言ふ此れ是れは凶年飢歲を守る、佛法の格式叢社の古實なりと、瘦せたることは考妣を喪する人の如く、衰へたることは重痾に罹れる人に似たり、凍餒困苦、鬼神も亦涙を落すべし、波旬も亦掌を合はすべし、今時諸方の叢林、佛閣の高貴、僧舍の嚴麗、二輪並べ轉じ、四事重ね備ふ、而るを顧みずして何の心ぞや、貧困飢凍、窮餓交煎の巷に在つて耳に聞く所は師の惡言苦罵、口に投ずる所は佗の粟麥粃糠、心の可なる底の事一滴も亦無し、然るに彼れ亦五尺の身を容るゝに所無き所以の輩に非ず、盡く是れ今時叢林頭角の上使なり、只各々透過を求

むるに急にして其の餘は總に顧みざる者なり、予聞き得て大に歡踊して曰く且喜すらくは佛法大に人を得べきの時なりと、師も亦宜しく向上の鉗鎚を提起して實參實悟の上士を求むべし、隨他意の說に涉つて第二機を以て人を接せば大に人を損せん、必ず他の悟門を妨げて蟲の氣息ある底の漢子も亦得ること能はず、予が如きは三十年前、師の提携に依つて精錬刻苦、多少の艱辛を喫し盡して本有の佛性を見得し法華眞の面目を徹了して一念三千の妙理、三諦即一の奥義に於て毫釐も疑惑無し、師亦吾を以て法華眞の面目を見得したりと爲して許可し給ひき、予も亦心に竊かに謂へらく天下既に定まりぬ、近頃師の碧眼錄を評唱し給ふを聞くに恰も田夫の杳かに階下に立つて中書堂上諸君の公儀を聞くが如し、瞽者の眸を張つて湘水の佳景を窺ふが如く、聾者の耳を欹て、洞庭の雅樂を聞くに似たり、此に於て大に力を失して慚汗腋に滴つて傷涙胸に滿つ、從前の苦修尺寸の功を立せざる者にあらざる者に似たり、初め吾が德力、師と一般なりと謂ひき、今予を以て

師に擬するに疲羊の駿驥を指して吾が父なりと稱するが如く、跛鼈の神龍を指して吾が師なりと道ふに似たり、心に竊かに師を以て吾を賺し給ふ者と爲して懊々として樂まず、師今又法華眞の面目の事を書す、一見して怨恨乍ち發す、故に言ふ又是れ止啼の金葉を包むと亦宜からずや、住庵の諸子も亦今往々此の欺息あり、況んや師も亦諸人辛勤して得る所を指して棺木裏の禪と稱するをや、予が曰く寔に其事あらん、嗟子來り進め、你老松の丘壑に秀づるを見る麽、枝柯九霄を衝き根盤三泉に徹す、上に百尺の絲あり下に千歳の苓あり、勢ひ蛟龍の霧を攫んで長空に上らんと欲するが如し、下に青々たる一寸の松あり猶甲子を戴いて立つ、指にても抜くべく爪にても截つべし、此の二つの物を指して他に問うて曰はん、是れ什麽ぞと、他必ず言はん、共に是れ松なりと、唯歳月を積んで養ふと養はざるとに在るらくのみ、言こと莫れ歳月是れ可なりと、你若し一箇の死棺材を守つて鬼家の活計を作し了らば縱ひ積んで驢年を重ぬと雖ども甚麽の用を作すにか堪へん、古

へ張氏の子あり、兄を張五と稱し弟を張六と曰ふ、兄弟糧を裹んで遠く百里に往く、中路にして各々金一鋌を拾得せり、大に歡踊す、而して後索居互に死生を知らざる者此に三十餘歳矣、六その兄の事を思うて四方に尋逐して其兄の所在を認め得て杳かに來つて相訪ふ、其兄の室を望めば水磨列り鳴り穀車轟き過ぐ、牛馬槽櫪を列ね家鵝溝瀆に滿つ、簫竿遠く流へて歌聲抑揚す、佳賓の往くあり高客の來るあり、六、震ひ恐れて直に門闕を越ゆること能はず腰を折り膝を屈めて畏る畏る名刺を出せば雙童來り迎ふ、容貌秀麗態度高雅なり、跼蹐して從ひ進めば屋壁の麗、堂宇の美、康藝が室に入るが如く石奴が堂に上るに似たり、魂蕩け股戰いて坐せん所を知らず、少らくあつて張五婢妾に扶けられて錦張を挑げ出づ、侍女圍み羅つて綺羅魂を驚かし繡紋目を奪ふ、金爐千花の芳を吐き玉佩百禽の音を流ふ、頭紅羅の帽を穿ち、肩紫錦の袍を掛く、綠熊の茵に坐し紫檀の杌に凭れり、奢の眸り虎の如く抗れる肩鳶の如し、六、一見して覺ゑず頭地に到る、身體委み

縮つて啼泣して休まず、頭を擧げて正しく視ること能はず、張五徐々として告げて曰く吾が弟何ぞ來ること晩つる、胡爲れぞ其れ此の如く郎當なるや、六、涙を拭ひ畏々問うて曰く、吾が兄今何れの侯に仕へ誰が家の恩顧を受けてか此の如く尊大、此の如く富貴なるや、張五の曰く我れ人の臣たる所以の者に非ず、我れ人の恩顧を受くる所以の者に非ず、我れは昔者金を拾へる者あり、六が曰く兄の拾へる所その數幾百筐の金とか爲るや、大車の重ね積みける者か、巨船の裏て載せたる者か、天の墜す所か地の埋む所か、遺忘する底誰とか爲る耶、張五曰く然らず三十年前我れと你と何某の路上に於て拾ふ所の者なり、六曰く怪しい哉纔に一錠の金にして此の富貴を得ることや、六此に於てか大に惑ひぬ、恐くは侯白黑の流亞乎、盜跖の部屬乎、若し果して然らば我は早く辭して出でん、出て謀つて九族の難を遁れん、豈坐らにして死亡を待つ者ならんと云ふ、張五唧々とし笑つて曰く你向に拾へる所の者今其れ何れの處にか在るや、博奕して失へる者と爲る乎、

且花酒の惑に罹れる者乎、六が曰く宜なる哉、我が郎落たるを見て我が兄の甚だ怪めることや、願くは左右を避けよ、吾れに一言あり密々に之を告げん、張五纔に目擊すれば妻孥皆退く、六畏々近く進みて曰く吾れ豈博奕し及び花柳を顧みる者ならんや吾が貧しきは金を失はざるにあり、吾が瘦せたるは金を護るが爲なり、吾が兄向に言はずや、你能く保護せよ亂に費し用ふること莫れと、吾は吾が兄の命を背かざるを以て足れりと爲る者なり、張六既に彼の金を得てより十重包裹して尊重保護すること和珠を懷くが如く夜光を持するに似たり、行くにも亦携へ歸るにも亦携ふ、蚤暮盜竊の難を恐れて三十年未だ曾て心を放して眠らず、人の窺ひ知らんことを恐れて友を絶ち交りを避けて故さらに貧窶の人と爲りて肩百綴の鶉衣を掛け首千補の烏帽を穿つ、人皆吾れを棄て顧みざるを吾は却つて此を以て幸ひと爲す、金を費し盡さんことを恐れて妻孥も亦養はず、常に獨子にして往き獨子にして歸る、常に人緣無き處に竄れて舊舍を尋ねて臥し破廟を求めて眠る、

終に客店に入つて宿せず、曾て糟糠にだも飽くこと無し、常に人の門戸に傍うて乞ふ、久しく立つて與へざれば稀に歌ふのみ、彼の金今此に在りと云つて左右を顧みること再三、飽くまで人無きを窺つて頸、垢膩の破布嚢を弛め再三押し戴き十重の包裹を解き左右を顧みて金を出して之に示して曰く、兄の拾へる今に在りや、願くば出して舊交を紹がしめよ、張五笑つて曰く三十年前你に別れて久しからずして彼の金を打失し了れり、六、勃如として熟々張五が面を見、且吾が身を顧みて曰く兄は失へり吾は護れり、吾は護れり兄は失へり、失へる兄は是の如く尊大なり、護れる吾は此の如く貧凍なり、或は目を張り或は頰を攢めて板齒唇を咬んで沈吟休まず、少くあつて曰く、護るが非にして窮餓し、棄つるが是にして豐饒ならば後れたりと雖も我も亦棄てんか、願くば之を棄つるの道を聞かん、張五大に笑つて曰く、你が拾へる所は金にして黃葉に劣れり、身を潤すこと能はざるのみに非ず却つて其の身を窮餓し其の心腸を傷賊す、若し黃葉を包めば來往

重からず、貧窶を現ずることを須ひず、茅舍の裏に在つて妻子を養ひ枕を高うして睡臥せんのみ、你が護する所は之を棄つる所以の道なり、我が棄つる所は之を護する所以の道なり、我れ初め金を得、你に別て後楊州に行く、金を以て黃葉よりも輕しとし放つて大に鹽を買ふ、塩を賣つて足らず、其息を束ねて大に綿絮を買ふ、綿を賣つて足らず、其息を放つて大に麻絲を買ふ、麻絲を賣つて足らず、其息を放つて大に粟米蔬果魚肉を買ふ、人を吳楚蜀魏の間に放つて山海の珍、水陸の美音ねく載せ聚め大店八九を開き、臣商三百人鐘を鳴し鼎に食む、大凡錢を握つて張五が門に入る者糟糠菜薪、鹽醋酒醬此に鬻がずと云ふこと無し、財を積むこと巨萬、陶朱を狹しとし猗頓を屑とせず、倉庫廩廋、甍を並べて列り立て、千頃膏腴の地を求む、松杉の山、梓楠の苑數十を買ひ得て今居を此の處に占む、是れ吾が向に黃葉より輕しとして金を棄てたる所以の道なり、六、立つて再拜して曰く我が兄萬歲、欽み　冀くば疾病無からんことを、兄の捨は捨に似て久しく護

を勤む、小人が護は護に似て久しく捨を勤む、捨護互に勤めて利害大に異あり、
寔に知る智者の手に入るときは則ち黄葉も亦眞金なり、愚者の手に落つるときは
即ち眞金も亦黄葉あり、自ら恨む、三十年心肝を惱まし氣力を盡して實に方寸の
功果を立てずと云つて聲を放つて哀號すと、參學も亦斯の如し、初め你が得る所
即ち是れ人々本具の性唯有一乘法華眞の面目なり、我が得る所も亦人々本具の性
唯有一乘法華眞の面目なり、此を見性と言ふ、是の性初め見道より終り種智成就
に到るまで毫釐も變遷なし、一鋌大冶の精金の如し、故に言ふ初發心時便成正覺
と、敎家に此れを十住の初住と言ふ、轉た最後の重關あり、誰か知らん祖庭猶天
涯を隔つること在ることを、往々此の一片の所見を擔つて乃ち曰く、我今既に朕
兆未發以前佛祖未興の處に向つて立つ、者裡全く生死無く涅槃無く煩惱無く菩提
無し、一代藏經は不淨を拭ふ故紙、菩薩羅漢則穢の如く參禪學道閑妄想、古則公
案眼中の翳、者裡今時無く那邊無く佛を求めず祖を求めず、饑飯困眠何の欠少す

る所か有らんと、者般の見解佛祖も亦醫することを得ず、只日々安閑の處を求め
て今日も只恁麼死獄狙地にし去り明日も亦恁麼死獄狙地にし去る、縱ひ恁麼にし
て無量劫數を歷とも依然として只是れ一個の死獄狙、什麼の用を作すにか堪へん、
如來は此れを狐癩野干の身に比し給ふ、鶩掘は呵して蚯蚓の智と爲し淨名は蕉芽
敗種の部類と云ふ、長沙は此れを百尺竿頭不動の人と曰ふ、臨濟は湛々たる黑暗
の深坑と言ふ、是を見地不脫と言ふ、謂はゆる機、位を離れざれば毒海に墮在す
る者あり、只一片の所見を執して措磨淨盡して一生を錯り了はる、彼の張六、一
鋌の金を懷いて困倦逼迫去死十分なる如くし、慈明、黄龍、眞淨、晦堂、息耕、
大慧の諸老、力を盡して攘斥すれども救ふことを得ず矣、老婦初め七八歳の時母
に隨つて敎院に入つて僧の摩訶止觀の中地獄の說相を講ずるを聞く、其僧辯才あ
り、叫喚無間焦熱紅蓮の苦境を演ぶ、恰も目のあたり見るが如し、一堂の緇素盡
く寒毛卓竪す、歸り來つて子が平生の殺業を計るに身の置き所なきが如し、動止

悚然肌膚栗々たり、竊かに普門品と大悲神呪とを把つて晝夜讀誦す、一日母と共に浴に入る、母湯の熱からんことを求めて婢をして頻りに薪を添へしむ、浸々として火氣肌を衝き浴盤大に鳴る、乍ち地獄の事を想念して聲を放つて悲號す、哀聲四隣を動かす、此れより竊かに出家を求む、父母許さず常に寺に行いて經を誦し書を讀む、十五歳にして出家自ら誓つて曰く願はくは肉身にして火も燒くこと能はず水も溺らすこと能はざる底の得力を見ずんば死すとも休まずと、晝夜孜々として誦經作禮、病惱或は針灸の間に於て點檢するに其の痛痒平生と異なることなし、心甚だ歡びず曰く我既に父母に背いて出家、未だ方寸の功果を見ず、我れ聞く法華は一代の經王にして鬼神も亦欽む、往々幽冥苦界の人、人に託して救を求むるに必ず法華を言ふ、熟々謂ふに他人の讀誦するすら且其苦患を拔く、況んや自身讀誦せんをや、且又經中必ず甚深の妙義あらん、此に於て親しく法華經を把つて窮め見るに唯有一乘諸法寂滅の文を除いて餘は皆因緣譬喩の說なり、此の

經若し者般の功德あらば六經諸史百家の書も亦功德あるべし、豈特り此の經をしも云はんや、大に懷素を失ふ、實に十六歳の時なり、十九にして因に正宗贊を讀む、巖頭和尙末後盜賊の爲に害せられて叫聲三里の外に徹すと、予謂へらく徹することは甚だ徹す、如何んせん盜賊の戈矛を免れざることを、嗟、巖頭和尙の如きんば僧中の麟鳳佛海の蛟龍なるすら且然り、死後豈獄奴の杖子を免るゝことを得んや、若し果して爾らば參禪學道何の益かあらん、佛法麼恁に虛誕なり、悔ゆらくは身を以て此の妖邪の隊裏に投ぜしことを、今夫れ如何すべき、此に於て大に懊惱す、食はざること三日永く望を佛法に絕つ、佛像經卷を見ること泥土の如し、專ら俗典を讀み詩文を弄して少しく憂愁を忘る、二十二にして若州に往いて虛堂の勝會に交り乍ち省覺す、其後豫州に在つて佛祖の三經を讀んで大に猛省す、晝夜無字を提起して片時も休まず、只愁ふ純一無雜打成一片かることを得ざることを、又愁ふ寤寐恒一なることを能はざることを、二十四歳の春越の英巖の僧舍に

在つて苦吟す、晝夜眠らず寢食共に忘る、忽然として大疑現前して萬里一條層氷裏に凍殺せらるゝが如く胸裡分外に清潔にして進むこと得ず、退くこと得ず、癡々呆々として只無の字有るのみ、講筵に陪し師の評唱を聞くと雖も數十步の外にして堂上の議論を聞くが如し、或は空中に在つて行くが如し、此の如き者數日、乍ち一夜鐘聲を聞いて發轉す、氷盤を擲碎するが如く玉樓を推倒するに似たり、忽然として蘇息し來れば自身直に是れ巖頭和尙三世を貫通して豪毛を損せず、從前の疑惑底を盡し氷消す、高聲に叫んで曰く也太奇也太奇、生死の出づべき無く菩提の求むべき無し、傳燈千-七百箇の葛藤、一揑を消するに足らず、此に於て慢幢山の如くに聳ゑ憍心潮の如くに湧く、心竅に謂へらく二三百年來予が如く痛快に打發する底之れ有るべからすと、一段の所見を荷うて直ちに信陽に行く、正受老師に謁して所見を演べ偈を呈す、師左手に言偈を握つて云く者箇は是れ學得底、那箇か是れ見得底と云つて右手を伸ぶ、余曰く若し見得底の師に呈すべき有らば

須ちく吐却すべしと云つて嘔吐の聲を作す、師云く趙州の無字作麼生か見る、余が曰く無字甚麼の手脚を著くる所か有らん、師指を以て余が鼻を拗つて云く多少か手脚を著け了れり、余擬議す、師大笑して云く此の守藏窮鬼子と、余顧みず、師云く個恁麼にして足れりと爲るか、余云く甚麼の不足の處か有らん、師南泉遷化の話を擧す、余耳を掩うて出づ、師云く闍黎、余頭を回らす、師云く此の守藏窮鬼子と、一夕師納凉して檐端に坐す、余又偈を呈す、師云く妄想情解、余高聲に叫んで云く妄想情解と、師卽ち予を捉住して瞋拳二三十終に堂下に突き落す、時に五月四日の夜、霖雨の後なり、予泥土の上に在つて偃臥して氣息共に盡く、去死十分、動も亦得ず、師檐上に在つて呵々大笑す、少らくあつて蘇息し起き來つて作禮す、通身汗流る、師高聲に叫んで云く此の守藏の窮鬼子と、此に於て親しく南泉遷化の話に參ず、寢食共に廢す、一日些の省覺あり、入室稟々下語すれども契はず、只云ふ守藏の窮鬼子と、予心に竊かに謂ひらく辭し去つて他方に往か

んと、一日城下に往いて托鉢す、狂人あり荳蔻を把つて予を打たんと欲す、予覺えず南泉遷化の話を打破す、其餘の數段の因緣、疎山壽塔の話、大慧荷葉團々の頌、自ら謂へらく盡く打發すと、歸り來たつて所見を演ぶ、師總に可否せず、只微々として笑ふのみ、此れより守藏の窮鬼子と言ふことを休む、其後省悟大に歡喜する者三兩回、恨む所は語路、到あり不到あり平生燈影裏に行くが如し、歸り來つて病に如何老人に侍す、一日息耕老師南浦和尙を送る偈に、相送れば門に當りて修竹あり、君が爲に葉々清風を起すと云ふを看讀して大に歡喜す、夜光を暗路に獲るが如く覺ゆ高聲に云く我れ今日始めて語言三昧に入得せりと立つて禮拜す、其の後行脚して路勢陽を歷て一日大雨を衝いて行く、雨水膝に到る、廓然として深く荷葉團々の句中に入得す、歡喜立つことを得ず、身を放つて水中に倒る、起立することを忘却して腰包皆浸す、行人怪しみ立つて扶け起す、予呵々大笑す、人皆以て狂せりと爲す、其冬泉州信田の僧堂に在つて夜坐す、雪を聽いて得所あ

り、翌年濃東靈松の僧堂に在つて經行、忽然として從前多少の所得を打失す、大に歡喜す、三十二歳にして此の破院に住す、一夜夢らく吾が母紫絹衣を以て予に附す、提起して兩袖甚だ重きことを覺ゆ、之を探るに各々一面の古鏡あり、徑り五六寸可り右手なるは光輝心肝に透徹す、自心及び山河大地澄潭の底無きが如く、左手なるは全面一點の光輝無く其の面新鍋の未だ火氣に觸れざる者の如し、忽然として左邊の光輝右邊に勝ること百千億倍なることを覺ゆ、此れより萬物を見ること自己の面を見るが如し、初めて如來は目に佛性を見ると云ふことを了知す、後來因に碧巖錄を取つて讀む、從前の所見と大に異あり、其の後一夜法華經を把つて讀む、乍ち法華圓頓眞正の奧義を徹見して最初一團の疑惑を打破す、從上多少の悟解了知大に錯り了ることを覺得す、覺えず聲を放つて啼泣す、須らく知るべし參禪は甚だ容易あらざることを、今放蕩老懶毫釐も取るべき所無きに到ると雖も自ら覺ゆ四十年終に空しく光陰を送却せざることを、是れ張五楊州に在つて金

を放つて艱辛せし所以の者に非ずや、予も亦吾子に効つて一旦の所見を擔つて揩磨淨盡して一生を錯り了らば彼の張六が一鋌の金を死守して其の身を窮餓し其の心肝を困煎せしと何ぞ異なることを得ん、天竺には此れを二乘長者の窮子と言ひ漢土には此れを默照邪禪の流類と言ふ、是れ皆菩薩の威儀を知らず、佛國土の因緣を明らめざるが致す所なり、今時往々一片の空理を擔つて佛を會し祖を會し古則公案を會し了つて盡く言ふ、棒の如くの陀羅尼の如く一喝の如しと、大に笑ふべし、勉旃諸子、佛道深遠なり、須らく知るべし、海の轉た入れば轉た深きが如く山の轉た上れば轉た高きに似たることを、若し自家得力の當否如何を知らんと欲せば先づ須らく南泉遷化の話に參ずべし、昔、三聖秀上座をして去つて長沙の岑禪師に問はしむ、南泉遷化の後作麼生、沙云く石頭沙彌爲りし時六祖に見ゆ、秀云く沙彌爲りし時を問はず、南泉遷化の後作麼生、沙云く伊をして尋思し去らしむ、秀云く和尚千尺の寒松ありと雖ども且つ條を抽ずる筍無し、長沙無語、秀

歸つて三聖に擧示す、三聖覺わず舌を吐いて曰く臨濟に勝ること七歩と、此の語若し見得分明なることを得ば儞に許す、小分の相應を得ることを、何が故ぞ人無きに獨語すれば其の賤しきこと鼠の如し、何を以てか驗と爲ん、牙を皷することを三下合掌して曰く、漸。

終

土臺記憶法

緒言

現今諸般の學術の進歩に伴ひ、過度に心神を使用する爲め、極度の疲勞を來し、諸種の疾病を惹起し、無慙にも、此の生存競爭の活社會に落伍者として葬られ、悲歎にくるゝものゝ、日々に增加しつゝあるの有樣を痛歎し、皆其の原因の心神極度の疲勞にあつて、而かも記憶と不攝生とに、大なる關係の存在せることを知り、此處に余は出來得る限り心を攝し、腦の疲勞を防ぎ、不攝生の不合理を說き、合理的なる腦の修養法を說述し、尙又出來得る限りの短時間を以て、難中の難なる諸學術の各課に亙る記憶を容易、且つ、確實に、腦中に記憶し得るの方法を案

出し、廣く諸彦に公開して如上の恨事を一掃し喜びを得んとするものである。

而して、文章は平易簡明を主とし、小六ヶ敷き理屈や、外語は成可く、使用せぬ樣にし、通俗的に說述する考へである。

尙一應申上て置かなければならない事は、此記憶法は最初は一寸平凡に感じ、又應用に困難を感ずる樣思はるゝ方もあるやも知れないが、充分其の原理を究めて實地に當つたなれば、決して左樣な事なく終りには非常に役立つて、一日も缺く事の出來得ない迄に至るものである。

初めは十時間を要する事も、三時間位にしか短縮する事が出來ないが、旬日を經るに從つて、次第に應用も廣くなり、又時間も早く、尙確實に腦中に記憶する事が出來るのであるから、諸君は成可く、始めから終りまで、充分讀みこなし、原理の那邊にあるかを了得し八方に實地活用せられん事をお願ひする。

又中には記憶法は、一種の靈法や、魔法の樣に、神祕視される方もあるが、決

して左樣なものではない、尤も、熟練してくると、殆んど神の樣な事も出來るが余の說く處のものは、專ら學理的に、腦力の攝養を圖り、而して人の氣の未だ付かない、微妙な点を捉えて、記憶法の根本原理としたのであるから、何事でも、靈法や魔法の樣に、一瞬の間に、記憶してしまうと云ふ事はできない。

而かし、例えば普通の人が十時間を要する事は、熟練するによつて、二三十分、乃至、一時間位で、充分に而かも確實に、記憶する事が出來るのであるから、殆んど魔法に等しい樣な力を見ることもできる。

なれど萬能の靈法等とは全然異なる事は豫め御承知を願ひたい。

第一章　記憶とは何ぞ

記憶は、人間の能力の中で、最も不思議な作用をなすもので、事に臨み、見聞

する諸事諸般の事項を留めて、時に及んで之を想ひ出し、活用の出來るもので、若し人間にして此の記憶の能力を有せず、想起す事が出來なかつたなら、智識の發達は勿論の事、人として何等の價値は無いものとなるのである。

記憶は、今日の學者が種々の學理を研究するにも之を要し、宗教家、教育家、生徒は尙更の事、生を此の世に持つ者は、皆此の記憶を離れて、事を成し、進歩を圖る事は出來ないのである。

斯樣に吾々人類には、記憶は最も必要であるが、此の吾々人類に與へられた、記憶の能力は、未だ完全な・合理的かものではない。

世には多くの人々が記憶力の弱いのを慨いて、立身成功を圖らうとはせず、又、中には生存競爭の渦中に入つて、心身を害し、學生なれば勉學中過度の腦力費消の爲め、神經衰弱其他の難病を起し、あつたら人生を、闇に暮す人が少くない。

尤もの次第であるが、偖て何故に此樣な事になるかと云ふに畢竟是れは記憶の

原理に暗く、勉學の方法を、あやまり、又攝生法が合理的に行はれないによると思はれるのである。

抑々此の記憶の務めは、其名の如くであつて、過去の經驗し見聞せる事を其儘再び之を心中に繰返し、若くは思つた當時の意識を伴つて、之を心中に現す作用である。

此の記憶に際し、最も短時間で、且つ確實に、又永久に記憶することが得られ、尙左程に腦力を使用する事なく、隨時に想起する事が出來たなら、最も理想的な、完全なものと云はなければならない。

一体記憶の强弱は、先天的に因るものであるが、後天的には、注意の度によることが多い。

其の記憶に際して、物事を心に印象することが、一般に深く且つ整然と行はれて居たならば、如上の如き欠点は、餘程緩和されるものであるから、此の印象に

今日の人は充分注意せられて、記憶に向つたから、後天的に記憶を増長せしめる事は斷じて疑ひの餘地がないのである。

又一つ此處に必要な事は、注意力に伴ふ處の觀念力である。此の觀念力によつて、先の注意力を結合し、確く心に刻む事に依つて尙一層の光輝を見るものである。

是れを以つて吾々が若し、注意力を發達せしめ、之を强壯にし、且つ巧みに我が觀念と觀念との結合に注意したならば、吾々の心の想起力を、其の把持力と、殆んど同等にし、吾々天賦の記憶をして、大いに發達せしめ得る事が出來るのである。

第二章　記憶を增進せしむる方法

古來より記憶を增進せしむる方法としては、幾多の傳說、幾多の書籍に散見す

る處によつて略其の大要を知る事が出來る。

然し乍ら是等古往の傳說、書籍による處のものは、多くは迷信に流れ、或は、方術に流れて根本とするべき身心の事に就ては何等の見解も下されて居ないのである。

古來文殊菩薩は智慧の菩薩となし、之を信仰することによつて記憶を增し智慧の泉を作るものとせられ、又は、草木の類を食し、或は何月何日或る方法による時は記憶の能力を增すものとの、觀念を有し、實行されて來たものであるが、之等は勿論迷信の部類に屬するもので到底耳を傾向ける程のものではない。

記憶は、吾等の少年時代に置ける時は、比較的良好であるが、老年に及ぶに隨つて次第に減退して行く事は事實である。其の原因の如何なる理由かは未だに發表されては居ないが、血液の循環の良否によることは爭そはれぬ事と思ふ。少年時は多く血液の循環良好なるものであるが、老年に及び次第に不良好となる事は

諸君も熟知の事と思ふ。此の血液の循環の良否は一方記憶の良否に關係あるばかりでなく、健康の上に非常かる關係を有するものである。

血液の循環を良好にし、身体の健全を圖ると云ふ事は、單に健康を得る計りでなく、記憶に於ても非常の關係をもたらすものである。

斯の如く身体の强健を得ると共に記憶の能力を旺盛にするものとしたならば健康を得ると云ふことは、又記憶力を增すと云ふことになる故に吾人は、先づ健康かる身体を得る事に努力し、間接、直接に記憶の能力を增進せかければならぬ。

又、健康は、完全に得られ血液の循環は良好なるも、其の精神亂脈なる時は、之又完全に記憶を增進する事を得ざるばかりでなく、記憶自体を得ることすら出來得ないのである。

されば健康を得ると共に精神の淸澄を圖ると云ふ事は、又記憶の能力を增進するの方法とかるのである。故に完全に記憶の能力を旺盛ならしめんとするには、

体的修養として身体强健法を、心的修養として、内觀法を修せなくてはならぬ。

（本書身心强健法中、『身体强健法』及び『内觀法』參照）

次に、人工的に記憶の能力を旺盛にし、尙又一度記憶せる事項も、隨時隨所に於て想ひ起す能力を養ひ、或は生來の記憶の能力をして其數倍又は數十倍の能力を發揮し、且つ一度記憶せる事柄は永久に忘却と云ふことのない樣にする方法は方術的によるのである。是れは現今各所に於て唱へられる方術的記憶法である。

第三章　記憶法の原理

吾々が日常人と對談したり、仕事したり、演說等を聽いたりする時に、其の對談中相手方の話の模樣、例へば「今日高い山に登つて頂上から遠方を眺めた時、遠く四國の方より大阪灣に至るまで、畫に書いた樣に見えた」。等の話の中に、若

し自分に、今日は四國の何處にか行かなければならなかつたか、手紙でも出さなければならぬ事があつた時、つい失念して居たのが、四國の言葉を聞いて其の事を思ひ出し、又仕事中空腹を感じて、鳥や獸に餌をやる事を思ひ出し、中には演説中の言説に、自分が曩に決心した事や、信條等の長日月を經た爲めに、失念して居た時に、其の失念して居た決心の事や、信條等の言説によつて、以前の事を想起する事が幾度もある。斯樣に一度記憶したる事項が、長日月を經て、自發的でなく他發的に、古い記憶を呼び起す事が、吾々には多く見るところの事實である。

一体人間は一度見聞した事は、容易に記憶を去るものではない。只之れを隨時隨所に、意のまゝに想起することが出來得ないのである。故に吾々が一度乃至二度、見聞した事は、他力的でなく自力的に聯想し何時何處に於ても、想起し得て活用の出來る樣にしたならば、記憶は完全のものとあるのである。

余の今述べんとする記憶法は、此の原理を用ひて、容易に一度見聞した事は、隨時隨所に於て想起することの出來る樣說述し、老若男女を問はず、普通理解力のあるものであつたならば自由自在に、應用の出來るやうにしたものである。

尙此の原理應用以外に、生理的方面からも記憶を强めんと、古今最も優れたる處の運動法と、神秘なる精神の修養法を說述し、生理的に血液の循環を旺盛にして、身体の强健を圖り、腦力の健全を保持し、健康と記憶の兩者をして完全にし、此の活社會に立つて、一歩も退くことなく、益々自己の意志をして遂行成就せしめんとするものである。

又今余の說かんとする方法による時は、二つの大なる得点がある。

其の一つは本法を應用する時は、短時間で且つ確實に記憶し得る事と、他の一つは、記憶の中で一番閉口する忘却とか失念と云ふ事が少くなることの二つである。

忘れると云ふ事が少ないから想起と云ふ事は自由自在にある。

第四章　記憶法の骨体

次に獨特の記憶法を應用せんとするに際して、充分心得て置かなければならない事項が四つある。左の四つが卽ちそれである。

一、結合觀念

二、注意觀念

三、印象觀念

四、土臺選定

結合觀念と云ふのは、何事も記憶に際して覺えんとする事項を或る事物に結び付ける心的方法である。例へば、市街歩行の場合、此處彼處に、購入すべき物の見當つて後日之を求めんとする時、其の店名を記憶に際し、自分の身邊あり、自

分の家族なりの、一人又は二人に、結び付けるである。卽ち、店名が、大和屋であつた時、若し自分の家族の中で、大和から來たものゝあつた場合、夫れに結合して置き他日其の家族を想起して、大和屋の店名を思ひ起すことである。

注意觀念といふは、是れは最も記憶に必要なる事項で、此の注意と云ふ事がなかつたならば、記憶は全然行はれないのである。

印象觀念といふは、此の注意觀念により深刻に記憶事項を自己の心に印象を與へる事であつて、此の方法が完全に行はれるに至つては、忘却も少く、間違もなくなるものである。

次に最も必要事項とするは土臺の選定である。

此の土臺の選定こそ、記憶法の根本道具となるもので、平凡に見ゐて中々平凡でない、大なる必要事項となるのである。

先に結合觀念を述べ、注意印象の二觀念を述べたが、此の土臺の選定が完全に

行はれなかつたならば、記憶法も普通の記憶と何等變りはないものとなるのである。

一體土臺とは何んであるかと云ふに、諸君も時々二度目に市街歩行か、旅行の際に各處各處に於て、特筆すべき事項のあつた際、順次歩行につれて、其の家其の場所其の處に於て、其の事項を思ひ出す事があるものでる。

其の思ひ出されると云ふのは卽ち、自己が二度目の通行の時其の場所又は家に心の注がれた時、以前の事を想起されるのであつて、家なり場所なりが想起の種となるわけである。

故に記憶に際し、記憶事項を自己の最も順序よく、而かも腦中に良く記憶されて居る或る事に結合させ、後心中で其の結合させたる、事項を順次に想起する時は、難なく記憶事項も糸を引く樣に、思ひ出されるので[redacted]此の場合に結び付けたるものを土臺と云ふのである。

第五章　記憶法の方法

第一節　結合土臺の選定

結合觀念とは、曩に述べた通り、今自己が記憶せんとする事柄を、或る地方、即ち地方にて有名なる處　又は目に見ゐる色々の物や人名にでも深く心に銘じて少しも忘れることのないものに、結合する心的方法である。

故に結合せんとするには、結合すべき土臺の選定が最も必要とある[redacted]若し土臺と云ふものがあかつたなら、結合せんとしても結合する事が出來なくなる譯である。しからば、土臺の選定には、如何なるものを如何にして定めたらば宜敷いかといふに、實驗上何うしても、手近で卑近なものが、最も良好な結果を見るようである。

例へば、

一、自分の家内中であれば、

父、母、兄、姉、自己、弟、妹、末子、

一、鐵道地理で定める時は、

東京、横濱、沼津、靜岡、濱松、豐橋、岡崎、名古屋、、岐阜、

大垣、米原、大津、京都、大阪、神戸、

一、市街を歩行する場合自分の家より順次に定める時は、

床屋、銀行、郵便局、呉服屋、雜貨店、魚屋、本屋、藥局、

等の樣に何人も即座に選定する事が出來、而して少しも腦を使用することなく又間違ひの絶對生せないものが宜敷しい樣である。

第二節　結合方法

此處に土臺の選定が出來たならば、結合の方法に入る[redacted]。土臺は良く出來て居ても、此の結合が完全に行はれなかつなら、結局記憶は混亂するのみで、

何等の効を見ることは出來ない[redacted]故に諸君は結合方法を充分練習せなくてはならないのである。

今其の一例によつて示せば、

酒。草。菓子。机。犬。牛。馬。手紙。本箱。硯。先生。學校。

右の樣な簡單な場合には、

結合土臺。結　合　方　法。　結合種別。

隣家。父は大變酒好きだ。　特殊事項へ、

次へ。次郎は草苅が上手だ。　特殊事項へ、

〃　小供は皆菓子が好きだ。　特殊事項へ、

〃　貧乏で机もない。　反對事項へ、

〃　母は犬が大嫌ひだ。　特殊事項へ、

〃　此家には牛馬共にある。　特殊事項へ、

〃　此の家は手紙をよく出す。　特殊事項へ、
〃　此處の先生の本箱は立派。　特殊事項へ、
〃　此處は筆屋だが硯もある。　類似事項へ、
〃　太郎は先生になる。　結果事項へ、
〃　此處は學校へ一番遠い。　反對事項へ、

斯の樣に選定土臺の家々の、特殊事項や、反對事項其他の事項に結び付けて、觀念したならば、最もよく結合し得て忘るゝ事がないのである。

然して一度此の方法によつて觀念し、結合するときは、其の結び付けた隣家を順次に腦中にて尋ねて行く時は、最初結び付けたる土臺が想ひ浮び、次に結び付けたる記憶事項が想はれ、順次にかくする時は順序も相違なく、且少しの苦痛も感ぜずして想起する事が出來るのである。ローマのシセロも、皆此の法を行つて、人々にも勸め自己も行つた樣、横井無隣氏著神祕論に發表されて居る。

即ち其言に、「若し記憶を良く、且つ之れを忘却せざらんと欲するものは、先づ或る場所を定め而かして記憶せんとする事々物々を、或る一定の場所の何物かに心の中にて結合し、之れを排列すべし。

然る時は場所の順序により、事物の順序を想起することを得べく、順次に記憶せる事物を表すならん。云々」と云ふてある。

斯樣に結合と云ふことは記憶に際して必要なものであるから、充分此の法を熟練し、機に臨み、變に應ずることの出來るやう留意せなければならぬ。

第三節　數字記憶法

數字を記憶せんとする場合に於て、其儘數字を記憶せんとすることは、中々六ヶ敷く且つ至難の業である。故に此の場合には、最初一より十に至る迄の數字に夫々の符號を付けておくのである。其の符號としては、最も覺え良く、且つ何人も間違を生せず、容易に記憶することの出來るやう左の通りに定めたが一番宜し

からうと思ふ。

一、ヒドビ
二、フレブニジ
三、ミミサザ
四、ヨファシ
五、イソコゴ
六、ムラロ
七、ナシ
八、ヤハバ
九、コクグ
十、トジュ
百、モモモ

千、チセ
万、マ
〇、レ

斯樣に各數字を變化さして、記憶し置く時は、如何程、多數の數字を配列されるも、少しも間違を生ずることなく、一回乃至二三回にて充分記憶し得られるのである。

左に數字記憶の一例を示さば、

結合土臺。　記憶事項。　第一變化結果

大阪	二三五九	フミイク
神戸	五五八三	ゴゴヤミ
明石	七九七四	ナクナヨ
姫路	二九五七	ニクイナ

岡山　三八八四　ミハヤシ
廣島　九二二九　クニフク
門司　六二七八　ムジナヤ

斯樣に澤山な數字の場合、先づ第一に第一變化結果の樣に、其數字を一個の言葉や物の名のやうに速早く組立て、順次に組立て乍ら結合土臺に結び付けて行く

[redacted]

「大阪から文いくから（フミイク）御覽下さい。神戸の方はごごやみ（ココヤミ）になりましたから左樣御承知願ひます。明石の妹にも泣くおよ（ナクナヨ）と申し傳へて下さい。姫路に御歸りにおつても、にくいな（ニクイナ）と思召さず、岡山の御林（ミハヤシ）や廣島の國福（クニフク）にも宜敷此事を御傳へ願ひます。又門司で面會の時むじなや（ムジナヤ）狐の事は委しく御話し致します。」

斯樣に結合方法の處で示した樣に[redacted]に、夫々の考へにて結合し記憶するときは容易に記憶することが出來る[redacted]

注意すべきことは、數字を變化し乍ら順次土臺に結び付けて行くことである。

尙一例を示せば、

一八九七二五八三七九八七五八七四二四六一〇

以上の時、

記憶事項。		變化結果。		變化事項。		結合法。
一八	イチハ	一羽	一羽	一羽の鳥は	一羽の鳥は	
九七二	クヒニ	喰ひに	喰ひに	喰はない	喰はないで	
五八	ゴハ	五羽	五羽の鳥は	皆	皆	
三七	ミナ	皆	皆	話	話しながら	
九八七五	クハナイ	喰はない	喰はないで			
八七四	ハナシ	話	話しながら			

二四六　　ニシム　　西向　　西向き
一〇　　ト　　飛　　飛び去つた

斯樣に變化し、順次結合土臺に結び付けて行く時は容易に記憶し得られるのである。

第六章　記憶法の要

記憶法中最も要点とするところは、以上再三說べた通り、結合土臺の選定である。若し此の土臺に變化少おく、種々の記憶事項に際して、自由自在に結合することが出來なかつたならば、殆んど記憶法は力なく、應用の範圍もせまいものとなるのであるから、土臺の選定は出來得る限り、誤謬を生ぜおい、且つ簡單おものにて成るべく多く定めて置き、何時如何おる處にても、多數の記憶事項を覺ゆることの出來るやう、土臺を固めて置くが肝要である。次に觀念力を充分養成し

て置かなければならぬ。觀念の力の弱い時は應々にして、記憶事項を霧中に迷はしめることが多い[redacted]

次には注意力と印象力とが非常に必要な事である。注意力と印象力とは共に觀念をする際殆んど同時に働くものであつて、何れの一つが缺けても完全な記憶を得ることは出來なく、間違も生じやすいのであるから、充分注意して前述の文章を熟讀し、よく記憶の原理を探究せねばならぬ。

第七章　永續記憶法

記憶法中、最も困難を感ずるものは永續記憶法である。何人も一度記憶した事も時日の經過に從つて、記憶を去る事は、自然の大原則であるから、全々之れを逃れると云ふことは出來ないが、餘程の点迄は方法によつて緩和することが出來る[redacted]

世の中には物覺えのよい人が、一度聞いて覺えて了ふ人が時々現はれる事があるが、偖て之れを永久に覺えて居ると云ふ人は殆んどない[redacted]又此の法が完全に行はれるものとしたならば、記憶法を習ふ必要はないのであるが、殘念ながら今の世には之れが完全に行ふ方法はないのである。

然らば之を緩和するには、如何なる方法をとつたならば、最も理想に近い成績を見る事が出來るかといふに、左記の事項に注意すれば宜しいのである。

一、所定の方法により記憶したる事項は、暗誦によつて選定土臺の如く變化せしめる事。

二、選定土臺に變化せしめんには、記憶後二回乃至十回位迄、日を置き、月を置き、繰返し記憶を呼び起す事。

三、結合土臺を速かに離るゝ事。

以上三つの事項で[redacted]第一項は、一度記憶せる事柄は、何時も土臺を頼つ

て想起するやうではならないから、早く土臺を離れて諳誦せよといふことである

第二項は、記憶事項を土臺のやうに變化する、謂ゆる諳誦の境に至る方法と、印象力を強くする手段である。

故に其の方法として第一の日三回乃至四五回繰返し、明日二回、五日後二回、一ヶ月後二回、半年後二回、一年後一回と云ふやうに繰返して想起するときは、自然土臺を離れ記憶に殘るやうになるものである。

第三項は、結合土臺を速かに離れよと云ふ事である。此の速かと云ふことは、土臺とならしめる最善の方法となるのである。

第八章　記憶法の欠点と其保護法

以上注意したる事、又は例によつて示したる方法によれば、記憶は充分行はれるのであるが、此處に未だ一つの欠点がある[redacted]

それは今注意力、觀念力其他によつて記憶せる事項も、想起に際して、全然結合せる土臺を忘れ、想起することの出來ない事のあることである。若しこれが想起することが出來ない時は、例へば、一二三四五六七八九と云ふ順序に記憶した事項も、最初の一と云ふ土臺の始めが想起されない故、後の二より九に至る事項は想起することが出來得ないのである。

斯樣なときには如何にすれは之れを防ぐことが出來るかといふに、實は何でもない事である。其方法としては、始め自己こ記憶せんとした事柄が何事であるかと云ふことを、一個の台の樣に記憶することである。かく台にして置く時は自己若しくは他人より問はれたる時、其の思ふ事、又は問はれることが記憶事項の土台となりおる故、苦もなく、選定土台を引出し記憶をたどることが出來るのである

第九章　他山の石

之れにて[redacted]記憶法を活用するに際して必要なる事項は、略說述したのである然かして最後に各種各般に亘る、實地應用法を各例に示して讀者の指針としたいと思ふたのであるが、此處に古くより傳りたる、物覺え祕傳と云ふ一文を、井上博士著、新記憶術に見たるより今其の全文を揭げて、諸君の參考にすると共に、對照批判の資とする。

一、物覺え祕傳

ある童子、論語の學而第一といふ、學而の二字を覺えず。師の敎へに從つて一旦は讀むと雖も、師を放れては又忘る。其の時師の曰く、

ガクジとは字をかくと心得よと敎へられたり、是れより再び忘るゝことなし。ただ忘れ易く覺えがたきは讀書なり。年來小兒に讀書を日課せしむるに、かくの如く魯鈍の小兒と雖も、此の法を用ふるときは覺えずといふことなし。ただ小兒の耳にも入りよく、諭し易き譬喩をとりて敎ふるときは、再三熟讀するに及ばず、

しかも終身記憶して忘るゝことなし。

此等の事は、知れたる道なれども、其の術甚だ卑近なるを以て、學者の口より發するを恥づ。此の書に示教するところは、少しも高遠の術にあらず。若し高遠ならば如何ぞ幼蒙に達せんや。故に其の卑近なるを主として敎へたるものなり。然れば賤しき俗謠俗諺及び小兒の訛言までも、取り拾うて、此の術の助けとなすときは、無用の用あり、此の術を忽せにせずして久しく修業せば其の功益大なるべし。然れば獨り小兒讀書の一助のみならず、或は途中馬駕籠にて筆紙の備なく或は其の場に臨んで記憶せざればかりがたき時、皆此の法を用ふべし。

此の法に依託種子あり。例へば學而の緣をかりて字をかくと云ふにとる、是を依託といふ。

詩の賦比興のこゝろなり。また依託のうちに一二三四等の次第あり、是れを種子といふ。

依託すといへども、種子なくしては繁文を憶すべからず、次第を知るべからず然れば依託せんと欲せば、豫め種子を記憶すべし。種子といふは體なり依託は用なり。種子の體は靜にして動く事なし。依託の用は。千變萬化して働くものと知るべし。

種子とは、例へば人身の正面に象りて、頂きを第一とし、額を第二とし、眼を第三とし、鼻を第四、口を第五、喉を第六、乳を第七、胸を第八、腹を第九、臍を第十とす。又人体の右邊にとりて、右の鬢を第一とし、右の耳を第二とし、右の肩を第三とし、右の臂を第四、右の手を第五、右の腋下を第六、右の脇を第七右の股を第八、右の膝頭を第九、右の足を第十とす。又人体の左邊にとりて、左の鬢より左の足に至ること、右邊に同じ。以上正面十、右邊十、左邊十、すべて三十則をよく覺え居て、是を依託の種子とするなり。

例へば、何によらず諳誦すべき品々十ヶ條もあるとき、人身正面にていはば、

第一の稱は頂きなり。此の頂きへ何にても第一條の品に緣あるべき事を思慮して譬ふるあり。さて第二の種は額なり。此の額何にても第二條の品に緣あるべき事を思慮して譬ふるなり。第三の種子は眼なり。此の眼に譬ふること前に同じ。

斯くの如く第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十の譬までにて、十ケ條の品々を悉く譬へ終れり。その譬ふることは、凡そ世間にあらゆることを觀念し或は俚諺、あてじ、謠曲、淨瑠璃、流行辭、何によらず卑俗ある事をも論せず、或は心中にて繪樣を作り、或は眼中に土地の景色を觀じ、その品々の緣をとるあり、これ自身の心裏に含める合符にして、他人に言ひ聞かすべき事にあらねば、人々の才智才覺にて、千變萬化、數も限りもあき事なるべし。

器物驗證

こゝに老人あり。器物の名目を人の語れるまゝ、ただ一度ききてよく諳誦せりその器物とは、

手拭、火鉢、毛氈、硯箱、琴、末廣、文箱、鏡、鍋、茶碗、

以上十種、如何して記憶せりや、といふ。答へて曰ふ、第一の頂きに手拭を置くと譬へ、第二の額に火鉢の火を譬へ、第三の眼に物見せる、もうせんとたとへ第四の鼻に、すゞばな、すゞりと譬へ、第五の口に、言葉の琴を譬へ、第六の喉に、咽喉を通れば末は廣しと譬へ、第七の乳に、文箱に房あり、乳房と譬へ、第八の胸に、胸の鏡と譬へ、第九の腹に、鍋一杯の食は腹ふくるゝと譬へ、第十の臍が茶を沸かすと譬へ、

第一、頂き、　手拭
第二、額、　火鉢
第三、目、　毛氈
第四、鼻、　硯箱
第五、口、　琴

第六、　咽喉、　末廣
第七、　乳、　文箱
第八、　胸、　鏡
第九、　腹、　鍋
第十、　臍、　茶碗

右の如くにして記憶せりといふ、皆々大に絶倒す。これ一二三の次第は、頂の次は額、額の次は目、目の次は鼻と云ふあらびを以て知るなり。そのならびを下より數ふれば、臍に茶碗は十番目、腹に鍋は九番目等と、逆さまにも知るなり。およそ箇條の次第あるものは、いつれもこれに準知すべし。

又物數多く、二十品もあらば、左邊の種を用ひて、左の鬢を第一とすべし。三十品ならば、右邊の種を用ふべし。又手拭を頂きへ置くと譬へ、火鉢に額と譬ふる類は、その人々の心中にての憶符あれば、ただ如何やうありとも覺えよきやう

に譬ふるを肝要とす。

心　法

その箇條の色々品々を他の人に言はせ、我は其の言葉を聞き居て記憶す。尤も二條一種を聞くとても、眼を閉ぢ雜念を生せず、心胸の間を清朗にして安靜からしむべし。是を覺心といふ。偖て其の種へ其の品を譬へ終るまでは、次の品を聞くべからず。或は其の種に一向譬への工夫つかぬもあり。然れども能く能く憶度すれば、遂に譬への緣出づるなり。其の時次の品を聞くべし。幾品ありとも、末までかくの如し。

又第一の種は頂きあり。此の種に其の品の緣を設けて、既に頂きへ預けたれば、是にて第一の種の役は濟むあり。例へば器物に物を入れて錠をおろし預け置きたる心持あり。若し覺束なく思ひ、半ばに及び跡へ返し見る事惡し。總じて記憶せんと欲せば、始終兩眼を閉ぢて心を丹田におとし、憶念すること肝要なり。

形有二有無一

總じて萬種の無形のものを記憶するには、有形のものにて譬へ、又有形のものを記憶するには無形のものにて譬ふるあり。是れ斯道の一大緊要の祕策なり。有形のものとは人倫、鳥獸、器財、草木、衣食、宮室の類、確と見るものを云ひ、無形の物とは言語、數量、時候、虛態門の類の、目に見えざるをいふ。

繁文

繁文とは、箇條數多あるをいふ。王代及び年號の列名、或は人數の列名或は源氏六十四帖の外題、或は蒙求評題、及、六十四卦の名などは、無形のものにして、しかも前後の次第あり。是等を記憶せんとならば、人體にては種少し。故に種を廣く取ること肝要なり。人家の屋造等を用ひて可なり。

人家種子

一、總廊　二、門　三、中間部屋

四、玄關　五、襖　六、使者の間

七、廣間　八、大座敷　九、床

十、違棚

右第一節

一、障子　二、椽側　三、廊下

四、茶室　五、坪內　六、手水鉢

七、飛石　八、柴垣　九、樹木

十、雪隱

右第二節

右の類其の餘はこれに準知すべし。總じて自己の居住先に見る處を第一の種とし、その次に見る處を第二とし、其の次を第三第四とす。

斯くの如く平生居室の具を用ひて記憶の種とせば、幾品幾色もあるべし。但し

動かざる道具を用ふ。此處彼處へ持ち歩く道具かごを取りて種とせば次第紊れて惡しきなり。

源氏驗證

例へば源氏六十四帖の名目を諳記せんとせば、先づ、

第一は總廓なり。其の廓の傍らに常に桐の木を植ゑたりと譬へ、

第二は門かり。門の内に箒木ありと覺え、

第三は中間部屋なり。此の部屋に人なし、蟬の抜殼と譬へ。

第四は玄關なり。これへは使者の顔の出づるところと覺ゆ。其の餘は是に準知すべし。然れば第一に相壺、第二に箒木、第三に空蟬、第四に夕顔と知る。是は我が居住の第一には總廓あり。其の次には我が屋敷の門あり。其の次には中間部屋あり。その向ひは玄關なりと、素より覺えて居るところへ、今の名目の縁をとりて心覺えして、それ〳〵へ預けたる故、自ら一二三の次第紊るゝことなく、逆

さになるとも又は一つばざめになるとも、自由自在に記憶せらるゝなり。

種有ニ多少一

種に取るべきものは、我が面部手足の親しきに若くはなし。是れにて一も不足なれば、自分の居住を用ふ。商家等は一を入口、二を敷居、三を中庭、四を中戸、五を上り口かどとるかり。その箇條數多ありとも、十種を一節とし又其の次の十種を二節とし、三節四節と十種づつに限るべし。自分の家にて不足せば、よく〳〵案内を知りたる他の家をも目付けとして不足を補ふかり。或は町に竪横の名或は一町の内にて商人の隣ならび、米屋酒屋等、又は其の土地の名所、舊跡、寺社等、東西南北のならび又は江戸海道五十三驛の次第等を、よく覺えたる人ならば、それを目付の種に用ふべし。

總論

總じて物事書付にして記憶し、又は書籍等に預け置き、それを諳誦せんとする

こと却つて遲し。ただ他人の誦するを自身聞き居て眼を閉ぢ心を冲寞にして、此の敎の如くなすときは、早く諳誦すといへり。

物見知の祕傳

例へば廣間に客十人列座す。或る人一見して、次の間に入るに、屏風を隔てその人數の座並又は其の人の紋衣服の色をいふに、或は上座より下へ五番目の客は桐の紋に花色の衣服、上座より上へ三番目の客は、柊の紋に蒲木の衣服等といふ。是れを見るに果して違ふことなし。人々不思議に思ひしとなり。

此の法は、前の器物十種の記憶の如し。第一の客、紋と色とを頂きとし。第二座の紋色を額とし、三座は目、四座は鼻と、人身の種に譬へ託して第十座臍に終る。但し記憶の術は、目を閉ぢて默觀するのみなり。

此の物見知りは、目を開き見るうちに、一物二種といふ簡法あり。これ物を見知る秘傳なり。

一物二種

それ諸物の數々あるを一覽して、逐一之を詳らかに認めんとすること宜しからず。たとひ認めたりとも、やがては紛るゝなり。ここを以て見知るべきものを一色に極むべし。もはや三四色に及べは必ず忘れやすし。其の物數は幾品あるとも たゞ二色を目印とす。之を一物二種といふ。その二色は、大じるし小じるしなりたとへば海上に同じやうなる船數多あり、陸には同じやうなる騎馬數多あり。

但し船には船じるし馬には馬じるしあり。是れ大じるしおり。その大じるしの中にて自分の心覺えなれば、舟にては幕のぼりの類、馬にては手綱鞍鐙の類にていづれなりとも一色に見知りを付ける、是れを小じるしといふ。

其の小印は、舟は幾艘ありとも或は幕と極め、馬は何足ありとも或は手綱と極める類をいふなり。此の一色づゝは、甚だ見覺え易きことなり。是を人家の種子等に譬ふるなり。

右の客十人列座するには大じるしなし。斯樣かるは何にても三色づゝのしるしを見て、人心の種子に譬ふるなり、これ大印なき時の法かり。扨て紋と色とに限らず、或は紋に柄絲、又は柄絲に帶の類、何にても心にまかすべし。たとひ紋も色も相同じき人ありとも、種子の譬へ所、違ひあるゆゑ紛るゝ事かし。其の餘は猶口訣多し。凡そ一切目に見るもの、此の心得を用ふる時は、能く物を見知ると云へり。

第十章　結　論

以上說述するところによつて記憶法の大略は表はれて居るつもりである。尙外に想像法、連續法、復式結合法、其他數項あるも、元來記憶法は方術的方法と、學理的方法と、精神的方法とによつて生れたるもの故、一度其の原理と、方法と、

健康の記憶に及ほす關係とを知る時は、各人の心のまゝに活用を要するものである故に、今回はこれを以て完結せんとするのである、宜しく諸君は以上の原理を探究せられ、各自の業務に實地活用せられんことを祈る。最後に及び最初は應用困難又は實地活用に何等効力なきものとして一笑し去らん事のなきをねがふのである。本法に限り修練に修練を積むに從つて非常なる益を得ることは、親しく余の實驗して知るところである故、本法を研究せらるゝ諸君は、其の妙味を得る迄は、相當の修練を積まれん事を希望する[redacted]何事も習慣性とかり、熟練するに隨つて、其の働きの妙に入る事は諸君も御承知の通りである、故に本法も此の境地に至る迄は懈怠なく修練せられん事を祈る[redacted]

大正十三年十月廿五日印刷
大正十三年十一月五日發行

不許複製

著作兼發行者　白井輝一良　愛知縣渥美郡二川町大岩九二
印刷者　米造　岐阜縣揖斐郡西黒野六六六
印刷所　芳文社印刷所　岐阜縣揖斐郡西黒野六六六

定價　金壹圓七拾錢

發行所　修眞會　愛知縣渥美郡二川町大岩九二

288
419

終